

飛鳥・藤原宮発掘調査概報 11



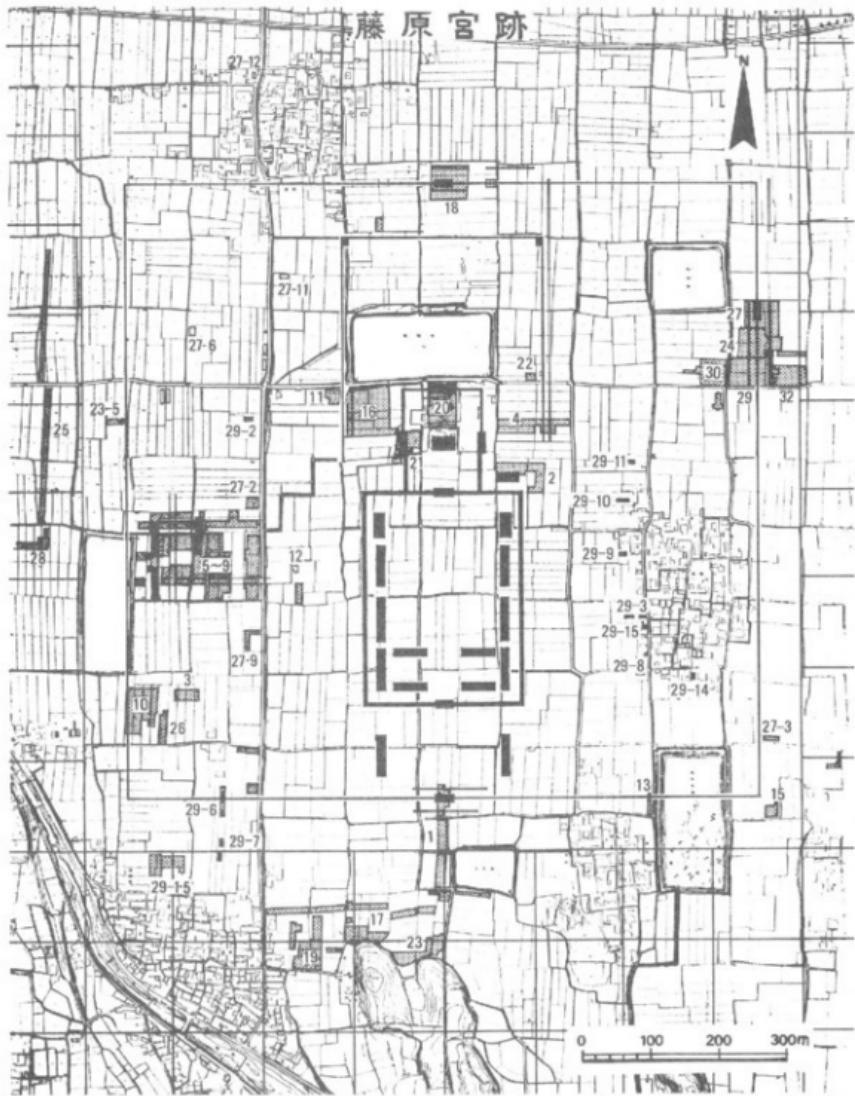
昭和 56 年 4 月

奈良国立文化財研究所

飛鳥・藤原宮発掘調査概報11 正誤表

頁	行	誤	正
18	下から9行目	S A2900は、	S A2900、
24	下から11行目	1~3の石	1~3個の石
〃	下から10行目	西に	東に
35	キャブション	出土出器	出土土器
40	下から10行目	土×	土壙
56	下から3行目	4は	5は
58	下から7行目	7世紀後半	7世紀前半
63	上から8行目	上方からは	上方には

藤原宮跡



網：調査地 数字：調査次数

飛鳥・藤原宮発掘調査概報 11

目 次

発掘調査地一覧表	2
藤原宮東面大垣の調査（第29次）	4
藤原宮東方官衙地域の調査Ⅰ（第30次）	12
藤原宮東方官衙地域の調査Ⅱ（第29-3・10・11次）	16
藤原宮南面大垣の調査（第29-1・5・6・7次）	18
藤原京右京五条三坊の調査（第28次）	23
藤原京左京五条四坊の調査（第29-17次）	29
藤原京左京九条三坊・十条三坊の調査（耳成線第1次）	30
大官大寺第7次の調査	37
桧隈寺第2次の調査	44
坂田寺第3次の調査	52
豊浦寺の調査	61
飛鳥寺周辺の調査	64
淨御原宮推定地周辺の調査	66
田中宮推定地周辺の調査（第29-4次ほか）	69
飛鳥・藤原地域の遺跡	70

発掘調査地一覧表

※本底報に収録

遺跡・ 調査次数	調査地区	面積	調査期間	地籍・地番	所有者等	備考
※ 28	6AJL -A・H	2,700 m ²	54.11.30. ~ 55.3.31	樋原市繩手町 202 - 7ほか	奈良県	国道165号 バイパス
※ 29	6AJB-Q	3,000 m ²	55. 4. 2 ~ 56. 3.31	樋原市高殿町 392 - 1. 393 - 1 398. 399. 400. 401	三橋 荣次 城本 基徳 森田 繁和 堀井 政一 喜多 成和 中尾 正雄	東面大垣
※ 30	6AJB-Q	1,193 m ²	55. 7. 15 ~ 56. 1.13	樋原市高殿町 402 - 1. 403	喜田 祥高 殿村竹次郎	東方官衙
31	6AJK-U 6AWN-F	1,000 m ²	56. 1. 7 ~ 遺続中	樋原市小房町	奈良県	国道165号 バイパス
32	6AJB-Q	1,100 m ²	56. 1. 26 ~ 遺続中	樋原市高殿町 392 - 1. 393 - 1	三橋 荣次 城本 基徳	東端地
※ 29 1	6AJM -C・D	480 m ²	55. 3. 17 ~ 55. 5. 1	樋原市飛彈町 94. 95- 1	樋原市	体育館建設
2	6AJF-S	50 m ²	55. 4. 15 ~ 55. 4. 16	樋原市繩手町有田 178 - 1. 179	鶴公農協	石山タンク 新設
※ 3	6AJG-C	100 m ²	55. 5. 14 ~ 55. 5. 23	樋原市高殿町施助 155 - 1. 156 - 1. 157	殿村竹次郎 殿村 勇 殿村 止作	農業用倉庫
※ 4	6AML-N	75 m ²	55. 6. 30 ~ 55. 7. 5	樋原市田中町 360 - 1. 361 - 1	竹村 福松	宅地造成
※ 5	6AJM -C・D	675 m ²	55. 7. 30 ~ 55. 10. 9	樋原市飛彈町 94. 95 - 1	樋原市	隠保館・児童館建設
※ 6	6AJH-Q	200 m ²	55. 9. 25 ~ 55. 9. 30	樋原市飛彈町 82	樋原市	仮設道路
※ 7	6AJH-R	35 m ²	55. 8. 27 ~ 55. 10. 7	樋原市飛彈町 76	樋原市	仮設道路
8	6AJG-D	3 m ²	55. 8. 18 ~ 55. 8. 22	樋原市高殿町施助 150 - 4	松井 清師	農業用倉庫
9	6AJG-A	12 m ²	55. 8. 19	樋原市高殿町 226 - 1	森田 翔	農業用倉庫
※ 10	6AJF-E	50 m ²	55. 8. 18 ~ 55. 8. 25	樋原市高殿町 319 - 2	平井 正輝	駐車場
※ 11	6AJF-E	28 m ²	55. 8. 18 ~ 55. 8. 19	樋原市高殿町稻井 314 - 6	塙見 和夫	農業用倉庫
12	6AWG-L	42 m ²	55. 11. 17 ~ 55. 11. 21	樋原市南浦町川戸 916 - 1	西井 千代	納屋
13	6AMF-M	3 m ²	55. 7. 16	明日香村小山 109	米田 義輝	家屋新築
14	6AJC-T	6 m ²	55. 12. 12	樋原市高殿町 90 - 6. 91	吉田 利隆	農業用倉庫

29-15	6AJG-C	11 m ²	55.12.2	権原市高坂町160-1	徳田 悅子	農業用倉庫
16	6AMF-B	8 m ²	56.1.13	権原市南浦町36-3	西井 貞司	納屋新築
※17	6AJC-B	72 m ²	56.1.19 ~56.1.21	権原市南浦町528-553	権原市	市道拡幅
耳城線 1	6AMG-II 6AMF -J・K	1,127 m ²	55.10.6 ~55.11.29	明日香村小山	明日香村	村道改良工事
大宮大寺 7	6BTK -K・L	1,320 m ²	55.7.7 ~55.12.10	権原市南浦町 13. 945.949.	谷口 悅子 上田三喜子 西井 康裕	寺域北限
椈隈寺 2	6BHQ-B	280 m ²	55.8.4 ~55.11.6	明日香村椈隈堂 594-1. 595	永井 義教 (続代)	中門推定地
坂田寺 3	5BST-G	100 m ²	55.4.8 ~55.4.28	明日香村大字坂田 290-2	西 正一	加庄 ポンプ場
3-1	5BST-A	11 m ²	55.4.10 ~55.4.12	明日香村大字坂田 287	西川 治夫	加庄 ポンプ場
3-2	5BST J	10 m ²	55.5.7	明日香村大字坂田30-1	堀部 新造	加庄 ポンプ場
豊浦寺 5	5BTU-L	59 m ²	55.3.25 ~55.4.8	明日香村豊浦 630-1	蘇我原敬淨	薬師堂解体 移築
奥山久米寺 5	5BOQ 1	15 m ²	55.5.28 ~55.5.29	明日香村奥山 652	米田 三郎	家屋新築
飛鳥寺 A	5BAS-R	16 m ²	55.12.8 ~55.12.9	明日香村大字飛鳥 703	辻本 佳央	宅地造成
※B	5BAS -J・K	67 m ²	55.12.18 ~55.12.23	明日香村人字飛鳥 177-1ほか	島田 清隆	農道新設
淨御原宮 推定地C	6AMD-L	17 m ²	55.8.6 ~55.8.7	明日香村大字飛鳥 384	吉川 恵昭	家屋新築
※D	6AMD K	125 m ²	55.12.8 ~55.12.25	明日香村大字飛鳥 351-1	奈 良 輝	土砂崩壊防止施設
田中宮 推定地	6AMM-P	40 m ²	55.6.6 ~55.6.10	権原市田中町 94-1. 104-3	丹出 道教 (代表役員)	天理教登栄 分教会建設

本文および遺構図に用いた座標は、すべて国土地理院第六座標系で、

遺構図では、「-」符号を省略している。

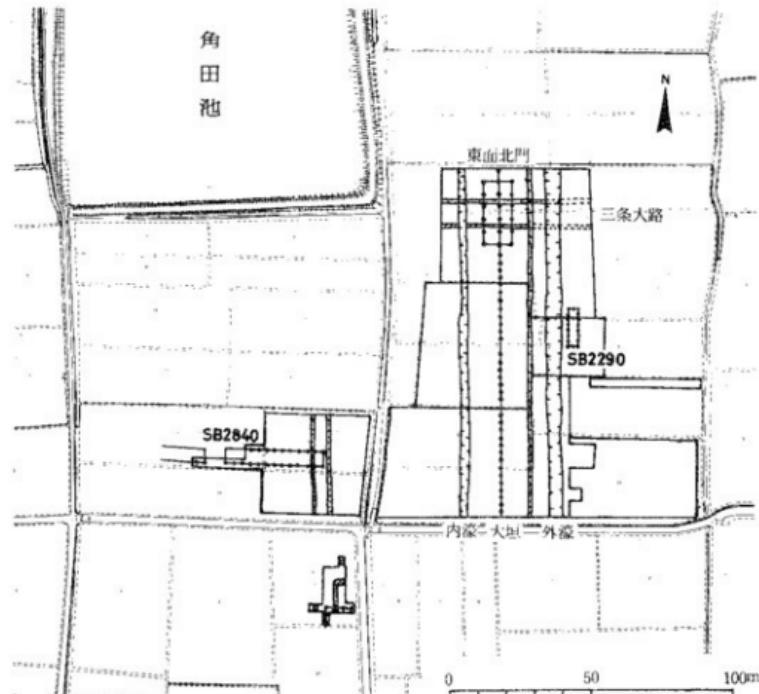
また、本文中では、「飛鳥・藤原宮発掘調査概報」を(概報)と略した。

表紙カット：坂田寺第3次調査出土・八花鏡

藤原宮東面大垣の調査（第29次）

（昭和55年4月～昭和56年3月）

この調査は、昭和53年度の第24次調査、昭和54年度の第27次調査に統いて東面大垣北半部において行った調査である。調査地は、宮大垣北東隅から南へ約260mの場所で、第24次調査地に南接する。調査範囲は南北約48m、東西約68mである。第24・27次調査では、東面大垣とそれに開く宮門（東面北門）、内濠、外濠や若干の建物、宮に先行する三条大路等を検出しているので、この近辺の様相がかなり判明してきた（位置図参照）。今回の調査では、宮東限の



藤原宮東面北門周辺調査地位図（1：2000）

諸施設をさらに広範囲に明らかにすると共に、これまで必ずしも充分解明できていない大垣西方地域の状況を明らかにすることを目的とした。

調査地の層序は上から順に、耕土、床土、茶褐色土となり、茶褐色上層の上面で遺構を検出した。

検出した遺構の時期は、藤原宮期、藤原宮期以前、その他に大別されるので、その区分に従って説明する。

藤原宮期の遺構 東面大垣 SA 175, 外濠 SD 170, 内濠 SD 2300, 南北溝 SD 2295, 土壙 SK 2801・2803・2807がある。

東面大垣 SA 175 は南北方向の掘立柱塀で、36mにわたり13間分を検出した。掘形の規模は前2回の調査で検出したものと大差ない。いずれも東に柱が抜き取られている。柱間寸法は2.66m(9尺)等間で、従来の知見と一致する。

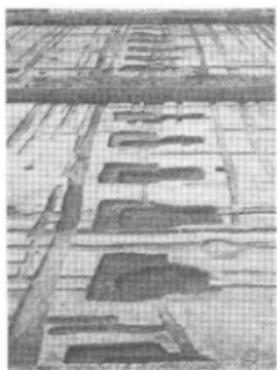
内濠 SD 2300は、大垣の西方約12mに位置する幅2.5~3m, 深さ約0.7mの素掘り溝で、総長36mにわたって検出した。濠の堆積土は3層に大別され、下層の第2・3層からは木簡、木製品、瓦、土器が出土した。木簡、土器とも第2層に多い。第1層は、濠廃絶時に埋めたと考えられる土層であり、次に述べる外濠の第1層も同じである。

外濠 SD 170 は、大垣の東方約20mに位置する幅5.5~6.0m, 深さ1.2mの素掘りの溝で、総長約47mにわたって検出した。堆積土は4層に大別できる。最下層の第4層は無遺物層で、第1・2層からの出土遺物も少ないが、第3層からは瓦、土器、木製品、木簡等が出土した。

南北溝 SD 2295は、大垣 SA 175の東約12mにあり、大半は畦畔下になる。幅0.6m, 深さ0.3mの規模で、断面形はV字形を呈する。前2回の調査で検



調査地全景(南東から)



東面大垣SA 175（南から）
出した溝と一連の溝で、宮の四周を巡っている
ものと考えられる。.

土壌SK 2801は内濠SD 2300の東岸にある。
東西3.6m、南北1.1mの不整形をした土壌で、
埋土から瓦、土器、木簡が出土した。SK 2803
は、内濠SD 2300の西岸に接して、東西12m、
南北20mの範囲に拡がる複数の不整形をした土
壌である。深さは0.2m前後であるが、部分的
に落ち込む箇所があり、そこから瓦、土器、土
馬が出土した。土壌の上面には炭化物を含む層
が全面にあり、その層は内濠上も覆っているので、内濠廃絶時に、濠と土壌が
同時に埋められたとみられる。土壌SK 2807はSK 2803の南西にある。直径が
0.6mの円形を呈し、中から土師器の完形の甕が出土した。

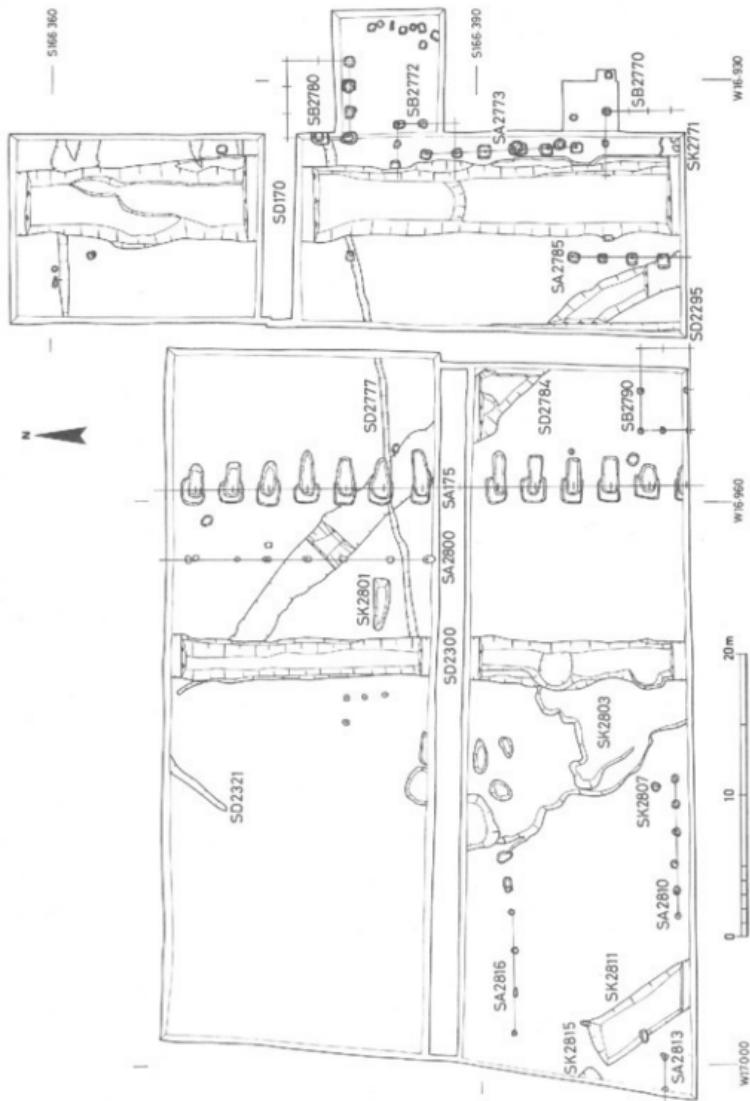
藤原宮期以前の遺構 藤原宮期以前の遺構はさらに7世紀代と古墳時代前
期の遺構に区分できる。

7世紀代の遺構は主に外濠周辺で検出したもので、掘立柱建物3、掘立柱塀
2がある。なお、調査区南東部に東接する地域を現在調査中（第32次調査）で
あるので、今調査区東辺の遺構については、その成果を参考にした。

東西棟建物SB 2780は、外濠の東にあり、桁行3間、梁行2間の規模である。
建物SB 2770・2772は外濠の掘削によって掘形の一部を失っている。SB 2770
は南北棟で梁行2間、桁行は3間以上となる。SB 2772は東西棟と考えられ、
梁行2間、桁行2間以上となる。

SA 2773は外濠の東岸にある5間の南北塀で、北端ではSB 2772に重複する。
北から2・3番目の掘形には柱根が残る。柱間寸法は2.0～2.4mあり、一定
していない。南北塀SA 2785は外濠の西岸にあり、3間分を検出したが、南へ
延びる可能性もある。掘形には柱痕跡が残り、柱間寸法は2.1m等間である。

これらの遺構の時期決定については決め手を欠くが、SB 2770・2772は外濠
との重複関係から、外濠掘削時より古い建物であることがわかる。東接する第



第29次調査追構配図 (1 : 400)

32次調査地では、藤原宮期より古い7世紀代の遺構が検出され始めており、今調査で検出した外濠周辺の遺構は7世紀の遺跡の一部とも考えられる。なお、これらの遺構の時期、性格については、第32次調査終了後に再検討したい。

古墳時代の遺構には溝SD 2784・2321・2777・土壙SK 2771・2811・2815などがある。溝SD 2784は調査区の南東から北西に走る素掘り溝で、北西端は内濠付近で消滅する。幅は平均3m、深さは0.6～0.9mある。堆積土は4層あり、上層の第1・2層から庄内・布留式土器が出上した。斜行溝SD 2321は、第24次調査区から延びている溝の末端部である。溝SD 2777は重複関係からみて、斜行溝SD 2784より新しく、内濠・外濠・大垣・SB 2780よりも古い。埋土の土質が類似していることから古墳時代前期の遺構と判断した。

土壙SK 2771は調査区南東隅にあり、西は外濠に切られているので全容は不明である。深さは約35cmあり、中から庄内式土器が出上した。土壙SK 2811は、調査区の南西にある溝状の土壙である。幅は約3m、深さは0.4mあり、8m分を検出した。堆積土は2層に大別でき、上層から弥生時代後期末の土器と庄内・布留式土器が出上した。この遺構の性格は不明であるが、西隣にある土壙SK 2815もSK 2811と形態が類似し、相関連するものとなる可能性が強い。

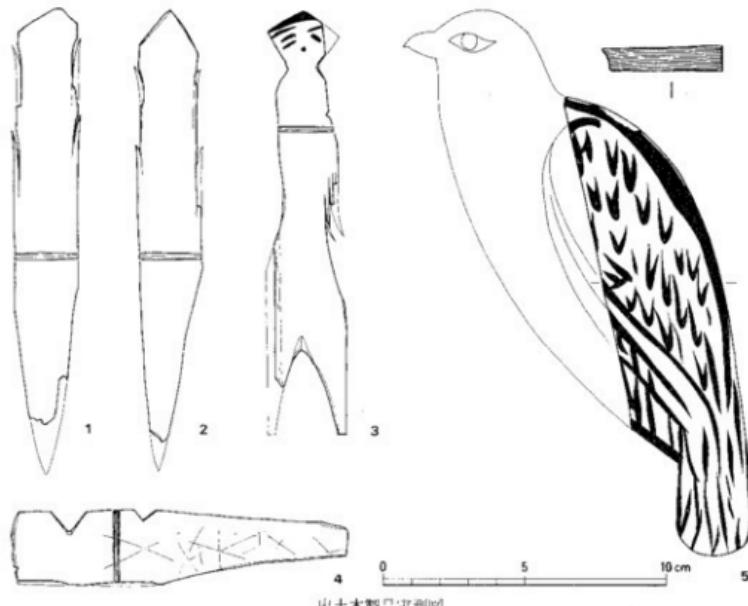
その他の遺構 以上に述べた遺構のほかに、7世紀から9世紀の間に入ると推定できる遺構がある。しかし、他の遺構との重複関係や出土遺物がないために、その時期を限定できないので、ここで一括して説明する。

大垣と外濠の間にある東西棟建物SB 2790は2間×2間の規模と推定され、柱掘形は小さい。南北塀SA 2800は大垣の西約4.5mにある。6間分を検出したが、南へは延びない。南端と南から4番目の掘形には柱根が残っていたが、柱間寸法は2.5～3.3mと不揃いである。SA 2810は調査区の南端にある東西5間の塀で、掘形の全てに柱痕跡が残っている。柱間寸法は中央間が2.3m、ほかは1.9mである。SA 2813はSA 2810の西にあり、東西塀の一部と思われる。SA 2816はSA 2810の北にある3間の東西塀で、方位は東で北に偏する。

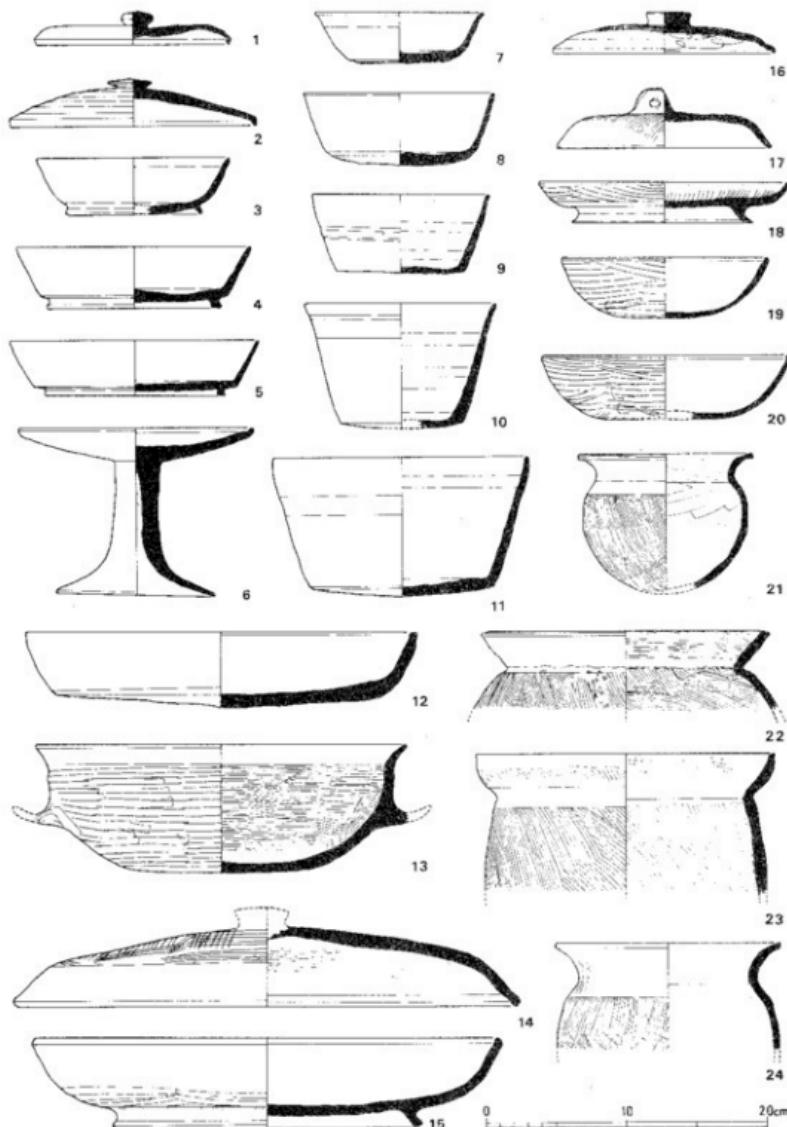
出土遺物 木簡、木製品、瓦、土器、金属製品などがある。時期的には弥生時代から中世に至るものがあるが、ここでは藤原宮期の遺物について述べる。

木簡は外濠1439点、内濠69点、土壤（SK 2801）43点、総計1551点が出土した。その内容を全般的にみると、年紀のあるものでは大宝以前7点、大宝以後6点あり、貢進物付札では評表記のもの17点、郡表記のもの14点であるので、半数以上は大宝以前のものということになる。意味のとれる木簡の中では文書様木簡が多く、このうち官司名を記すものには、中務省、民部省、皇太妃宮職などのはか、大膳職、大炊寮、内膳司、造酒司、園池司等の宮内省被管官司が多い。貢進物付札は19カ国にわたっており、伊勢、若狭が多いが、大倭、山背、川内など畿内の國も目立つ。

個々の木簡の内容では、外濠から出土した「皇太妃宮職」名を記したもののが注目される。また、内濠からは「皇太妃宮舎人」と記したものも出土している。当時、文武天皇の母の阿閉皇后が皇太妃と称されており、後に即位して元明天皇となる。皇太妃宮職は同皇后のために設置された官司であろう。このほかに「多治比山部門」と記した木簡や長楕円形の小板に仏像を墨画したものがある。



出土木製品実測図



出土土器実測図（内添 2・4・5・9・11～14・24、他は外添）

なお、本簡の詳細については『飛鳥藤原宮発掘調査出土木簡概報』(六)（昭和56年）を参照されたい。

木製品は、外濠から削り掛け（1・2）、人形（3）、馬形（4）などの祭祀具のほか、曲物容器や杓子が出土している。内濠からは、鳥の側面形をかたどった板の片面に羽毛を墨線で表現したもの（5）が出土している。

瓦には、軒瓦、面戸瓦、熨斗瓦、丸瓦、平瓦がある。軒瓦の出土点数は、第24・27次調査に比較して少なく、軒丸瓦は7型式16点、軒平瓦は8型式22点である。そのうち、内濠と土壙SK 2803からの出土が3/4を占め、外濠からの出土は僅か4点を数えるにすぎない。外濠の調査面積に比べて、軒瓦出土点数が激減している点は注目すべきであろう。すなわち前2回の調査における外濠の瓦出土状況は、藤原宮廃絶時に東面北門および南北棟建物SB 2290所用瓦のうち、再使用できない瓦を外濠に一括投棄した事情を反映していると考えられる。

土器は外濠と内濠から主に出土した。内濠では第24・27次調査において多量の土器が出土しているが、今回の出土量は少なく、前2回の調査時の各々1/4にも満たない。内濠出土土器については、その一部を紹介している（概報9）。今回出土した上師器のなかには、外面を口縁端部まで削るもの（19・20）のほか、形態・手法の上でも従来知られている藤原宮期の土器とは異なったものが多く出土しており、宮使用土器の実態解明に新たな手懸りを得た。

まとめ 今回の調査では、前2回の調査と同様に東面大垣・外濠・内濠を検出したほか、外濠の東方で若干の建物遺構を発見した。一方、大垣西方の宮内では藤原宮期の顯著な遺構はなく、後述の第30次調査で検出した東西棟建物SB 2840との間約60mほどは空閑地となっていたことが考えられる。

藤原宮の東面する門の門号については、第27次調査で外濠から「少子部門」「建部門」と記した木簡が出土している（概報10）。今回は外濠から「多治比山部門」と記した木簡が出土したが、平安宮の例からみると、多治比門は北面し、山部門は東面する門とみられるので、先の少子部門、建部門と合せて藤原宮東面の3門号が揃うという画期的成果を得た。3門号がそれぞれ北・中・南のどの門に該当するかは今後の検討課題である。

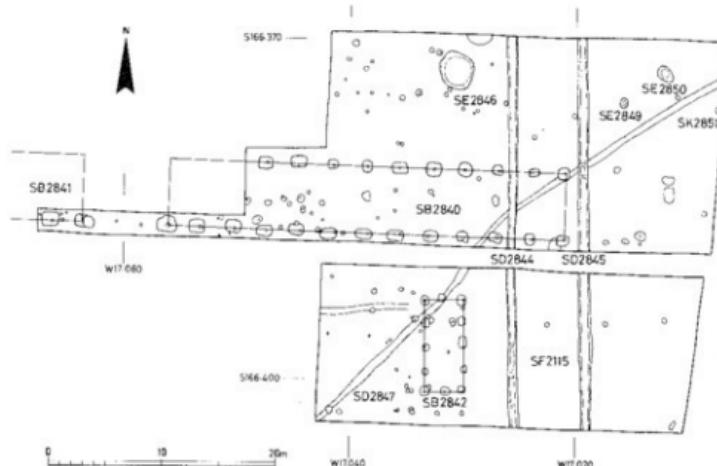
藤原宮東方官衙地域の調査 I (第30次)

(昭和55年7月～昭和56年1月)

この調査は東面大垣地域を対象とした一連の調査に統いて、その内側に想定される東方官衙地域の解明を目的に実施したものである。調査地は東面大垣地域の第29次調査区に農道を隔てて西接する場所である。東方官衙地域の調査は、これまでにも高殿町の住宅密集地で、小規模な調査が行われているが、本格的な調査は今回が始めてである。なお、今回の調査区の南で、昭和52年に実施した第21-1次調査では、藤原宮に先行する条坊遺構・四条条間路と東二坊坊間路との交差点ーと藤原宮期の建物1棟を検出している(概報8)。

調査区の層序は、耕土、床土、灰褐色土、地山となり、地山面で遺構を検出した。地山は調査区西半では黄褐色粘土、東半部にかけて黄褐色砂質土となる。また、遺構面は南西から北東に向って低くなり、比高差は40cmある。

今回検出した遺構は掘立柱建物3、井戸3、藤原宮に先行する東二坊坊間路



第30次調査遺構配図(1:500)

とその両側溝、溝2、小柱穴などがあるが、調査面積に比べて遺構の密度は低い。遺構の時期は、藤原宮期、藤原宮期以前に大別されるので、その区分に従って説明する。

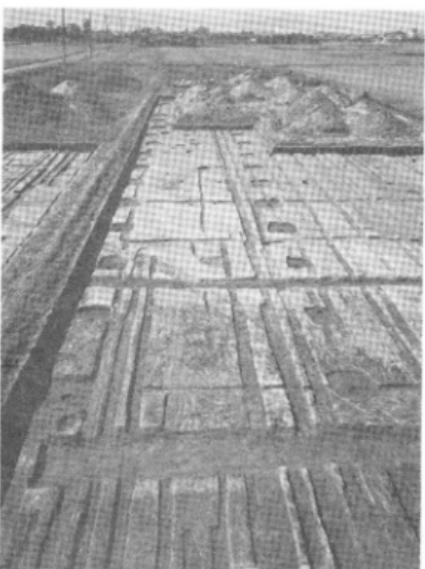
藤原宮期の遺構 東西棟建物SB 2840・2841の2棟と素掘りの井戸SE 2846がある。

掘立柱建物SB 2840は桁行12間（総長35.2m）、梁行2間の長大な東西棟建物である。柱間寸法は桁行、梁行とも2.93m等間である。柱掘形の大きさは一定していないが、大きいもので東西1.2m、南北1mの隅丸長方形を呈し、径0.25mの柱痕跡が残っている。なお、東妻柱については精査にかかわらず、柱掘形を検出することはできなかった。SB 2841はSB 2840に柱列を揃えた建物と考えられ、柱穴2個を検出している。おそらく、SB 2840の西妻から7.3m離れて同一規模の東西棟建物が並んでいたと推定される。この2棟の建物は方眼方位北に対して東に $1^{\circ} 56' 57''$ 偏している。

井戸SE 2846は、SB 2840の北約9mのところにある。平面形は円形をなし、直径2.5mある。深さは0.7mしかなく、後世におけるある程度の削平を考慮したとしても、通常のものよりも浅い。しかし、水脈にあたっているためか、現在でも湧水が激しく当時でも充分に井戸として機能していたと考えられる。

藤原宮期以前の遺構 藤原宮期以前の遺構は、藤原宮期直前の遺構と古墳時代前期の遺構に区分される。

藤原宮期直前の遺構には東二坊坊間路SF 2115と両側溝SD 2844・2845及び



SB 2840・SF 2115（東から）

南北棟建物 SB 2842 がある。東二坊坊間路は、四条条間路との交差点の北約23mの地点から、約32mの間を検出した。道路幅は側溝心々で 6.25m で、道路の方位は、方眼方位北に対して西に 38° 48' 傾している。両側溝は幅約 0.9 m、深さ 0.2 m である。西側溝 SD 2844 と藤原宮期の建物 SB 2840 の重複関係からみると、両側溝は藤原宮期に埋め立てられたと考えられる。

南北棟建物 SB 2842 は桁行 4 間、梁行 2 間で、柱間寸法は桁行 1.8 m、梁行 1.7 m 等間である。柱掘形は平均して方 0.7 m と小さく、深さも 0.5 m ほどである。柱掘形の一部には柱根が残っている。

古墳時代前期の遺構は 2 基の井戸 SE 2849・2850 と土壙 SK 2851 がある。

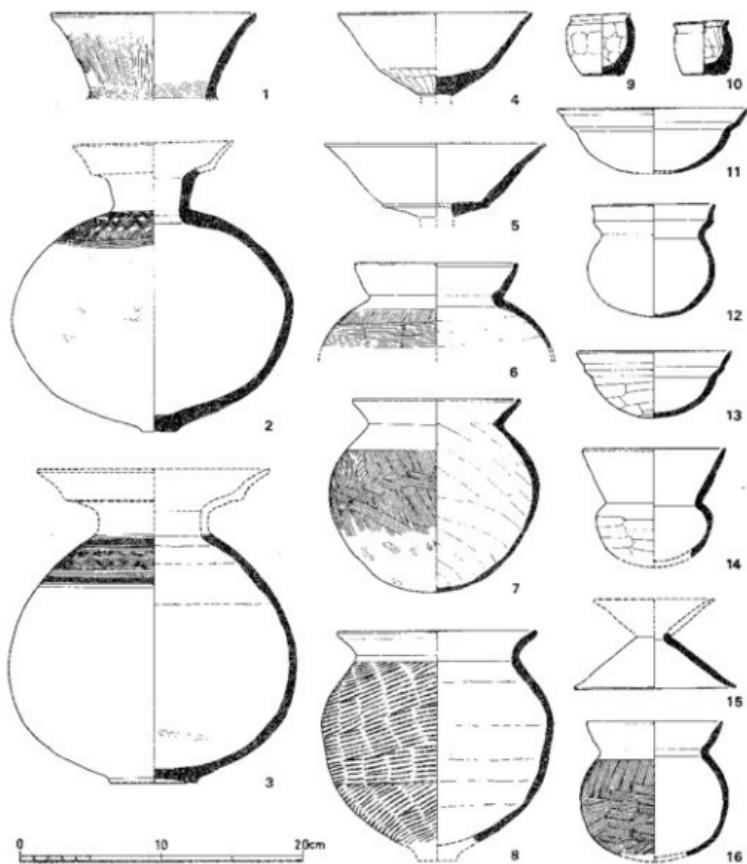
井戸 SE 2849 は径 0.7 m、深さ 1 m の不整円形を呈し、断面形は底部近くで袋状となる。埋上には多量の炭化物が含まれ、上層から楕円形をした槽、井戸底から布留式土器の甕が出土した。井戸 SE 2850 の平面形は楕円形を呈し、長径 1.6 m、短径 1 m、深さは 1.2 m ある。井戸からは図示したような土器が出土した。土壙 SK 2851 は直径 0.6 m、深さ 0.3 m の円形を呈する土壙である。

また、斜行溝 SD 2847 は幅 0.6 m、深さ 0.1 m の規模で、第24次調査で検出した斜行溝 SD 2305につづくと考えられる。先の調査では、SD 2305 を藤原宮期の排水施設としたが、今回の調査では、SB 2840、SD 2844・2845との重複関係から、SD 2847 を藤原宮期直前の時期より古いものとしなければならない。

出土遺物 藤原宮期に関連する遺物は極めて少なく、軒瓦は軒丸瓦が 1 点出土したのみである。土器は、井戸 SE 2846 と東二坊坊間路の側溝から出土したもののがわずかにまとまりをもつ。古墳時代の遺物には 2 基の井戸から出土した土師器がある。図示した SE 2850 出土土器は SE 2849 出土土器よりも古い様相を示している。1・2 は井戸底から出土した。

まとめ この調査では、藤原宮の東方地域に配された官衙の一部を確認した。東西棟建物 SB 2840 とその西に想定される同規模の建物からみて、この地域の官衙は長大な建物で構成されていたと考えられる。このような建物配置が、先に明らかにした宮西方官衙の建物配置と類似している点は注目されよう。

藤原宮期の建物と条坊計画との関係についてみると、SB 2840 の北側柱列は、



井戸 S E 2850 出土土器実測図

第21-1次調査で検出した四条条間路の心から約45.5 m の位置にあり、先行条坊の坪の南側に配置されていることがわかる。また、東二坊間路から東面大垣に至る約60 m の間は空閑地であった可能性が強い。このように、ここでは先行条坊地割が標準となって藤原宮の建物配置が行われたと考えられる。なお、藤原宮期の建物SB 2840は、宮造営方位と逆に北で東に偏している。藤原宮期にはこうした方位を示す建物は知られておらず、今後類例をまって検討したい。

藤原宮東方官衙地域の調査 II (第29-3次ほか)

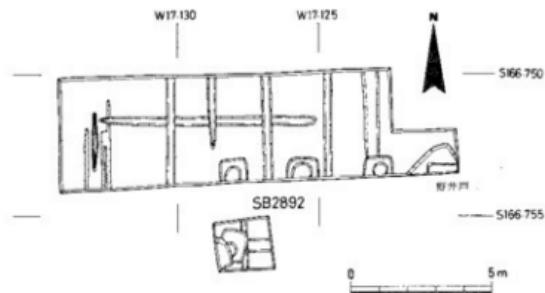
(昭和55年5・8月)

高殿町において、農業用仓库の建設に伴う一連の事前調査を実施した。藤原宮朝堂院の東方150m付近にあるこれらの調査地には、宮の官衙建物の存在が想定されている。調査件数は6件を数えるが、このうち藤原宮期の遺構を検出した第29-3次、同10次、同11次調査についてその概要を述べる。

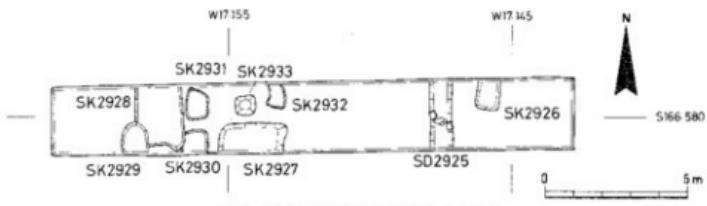
第29-3次調査 調査地は、報恩寺の南西40mの水田で、東一坊大路の宮内延長部にあたるため、東西に長い調査区を2カ所に設けた。調査地の層序は、上から耕土、床土、灰褐色粘質砂土(地山)の順になり、地表下0.4mの地山面で遺構を検出した。調査の結果、大路の痕跡を認めることはできなかったが、東調査区において藤原宮期の建物の一部を明らかにすることができた。

藤原宮期の掘立柱建物SB 2892については、東西2間、南北1間分を確認した。建物の棟方向、規模は不明である。柱掘形の平面形は一辺約1mの方形をなし、深さは0.8mある。柱はいずれも抜取られているが、柱間寸法は約2.7m等間に復原できる。この建物と本調査地の北方35mで検出された掘立柱建物SB 2370(第23-4次調査、概報9)とは、柱間寸法、柱掘形の規模・形状が共通しているので、両者は同一官衙に配置された建物と考えられよう。

第29-10次調査 調査地は、第29-3次調査区北方170mの宅地である。当調査地も東一坊大路の宮内延長推定位にあたるため、東西18.5m、南北2.5mの調査区を設定した。調査地の層序は、褐色砂質土(客土)、旧水田耕土、同床土、



第29-3次調査遺構配図(1:200)



第29-10次調査遺構配置図（1：200）

黄褐色土（地山）の順であり、床土と地山の間には、薄い中世の遺物包含層が部分的に認められる。土層の堆積状態は、調査地周辺が中世以前に地山に達する削平をうけたことを示している。

遺構はすべて地表下0.4mの地山上面で検出した。藤原宮期の唯一の遺構であるSD 2925は、東一坊大路の東側溝と考えられる南北溝である。上部を大きく削られており、かろうじて底面近くが遺存する。幅0.8m、深さ0.1mあり、溝底には砂が堆積する。溝内からは少量の土器とともに、砂岩の切石2点が出土した。この溝心の座標をもとに、東一坊大路を5丈幅と想定して朱雀大路までの道路心々距離を算出すると、約269.7mとなり、ほぼ一坊（900尺）に近い数値が得られる。またSD 2925を仮に東側溝とすると、SD 2925以西は宮に先行して造られた東一坊大路の路面となり、その西側溝は調査区外にあることになる。藤原宮期以外の遺構には、古墳時代と中世の土壤がある。古墳時代の土壤SK 2933は、径0.7m、深さ0.8mの規模である。土壤の底からは完形の布留式土器甕2点が出土した。SK 2926～2932は、中世の土壤群である。土壤群の性格は不明であるが、その形態から、浅い皿状の土壤SK 2930～2932と、方形の深い土壤SK 2927～2929の2つのタイプに分かれる。土壤からは13世紀に位置付けられる瓦器楕・土師器皿が出土している。

なお、本調査区の北方約60mの水田で、第29-11次調査を行った。調査の結果、藤原宮期の南北溝SD 2937、柱根の残る小柱穴1などを検出したが、調査区が狭小なため、遺構の性格などを充分明らかにすることができなかった。今後、周辺地域の広範な調査が期待される。

藤原宮南面大垣の調査（第29-6次ほか）

（昭和55年3月～昭和55年10月）

この調査は藤原宮の南西部にある飛弾町に建設される体育館、隣保館および建設予定地への仮進入路等の工事に先立って実施したものである。調査次数は体育館予定地を第29-1次、隣保館予定地を第29-5次、進入路を第29-6・7次調査とした。一連の調査地は、藤原宮南西部から藤原京右京七条二坊にまたがる地域にあたるので、ここでは宮域の調査結果から述べることにする。

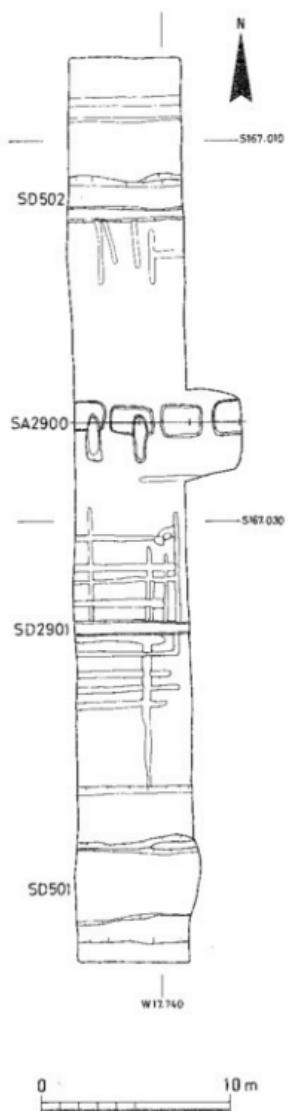
第29-6次調査　調査地は南面西門推定地の西約60mにあり、先年、南面内濠を検出した第19-2次調査地に西接している。調査は、南面大垣、内濠、外濠の検出を目的とし、南北48m、東西6mの調査区を設定した。調査区の層序は上から耕土、床土、灰褐色砂質土、黄灰褐色粘質土、黒褐色土、灰色粘土の順である。藤原宮期の遺構は調査区北半では黄灰褐色粘質土層の上面で検出されたが、調査区南半ではその層がなく、下層にあたる黒褐色土層の上面で検出されたものもある。なお、黒褐色土層は弥生式土器（畿内第V様式）の包含層である。

調査の結果、所期の目的通り藤原宮南面大垣SA 2900は、内濠SD 502外濠SD 501と東西溝SD 2901を検出した。

南面大垣SA 2900は、東西方向の掘立柱塀で3間分ある。柱塀形は方形で、南北約1.5m、東西約2.0m、深さは約0.8mである。柱は南方へ抜き取られている。柱間寸法は、約2.66m（9尺）等間であり、東面大



調査地全景（南西から）



垣の柱間寸法と一致する。

内濠 SD 502 は、大垣の北約12mにある素掘りの東西溝で、幅約 2.5 m、深さ 0.65 m の規模である。断面形はU字形を呈し、堆積土は3層に分かれる。最上層の第1層からは多量の瓦が出土したが、第2・第3層からの遺物の出土は少ない。

外濠 SD 501 は、大垣の南約25mにある素掘りの東西溝で、幅約 6.0 m、深さ 1.3 m の規模である。断面形は逆台形状を呈し、堆積土は5層に分かれる。遺物は最上層の第1層から第5層に至るまで、瓦、上器が含まれていた。このほか、第3層からスッポン、第4層から木簡6点、人形1点、犬・馬骨が出上した。

東西溝 SD 2901 は、大垣の南11mにある素掘り溝である。幅約 0.7 m、深さ 0.25 m で、東面大垣の東方にある SD 2295、および北面大垣北方の SD 144（奈良県教育委員会編『藤原宮』昭和44年）と同じく、宮の四周をめぐる溝と考えられる。

遺物には木簡、木製品、瓦、土器、動・植物遺存体があり、主に内濠、外濠から出土した。木簡は外濠から6点出土しているが、その中には大宝令あるいは淨御原令の篇名の一つである「考仕令」と記された断片があり、注目される。

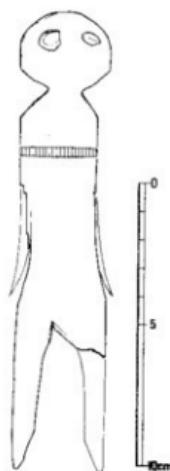
木製品では外濠から出土した人形がある。長さ 16.2 cm、幅 3.7 cm、厚さ 0.4 cm である。頭部は円形にかたどり、顔面は両眼を抉り込んで表

第29-6次調査造構配図図(1:300)

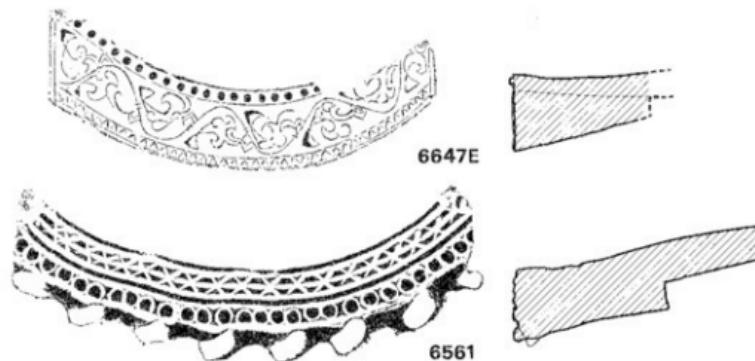
現するだけで、墨書きはない。

瓦には軒丸瓦、軒平瓦、面戸瓦、熨斗瓦、丸瓦、平瓦などがある。軒瓦は総数36点で、そのうち内濠から8点、外濠から13点出土した。軒丸瓦は外濠から6278B型式が2点出土したのみである。軒平瓦は9型式34点あり、そのうち4型式8点は内濠、7型式11点は外濠からの出土である。型式では、内濠からは6561型式、外濠からは6646B・6647E型式が目立つ。面戸瓦・熨斗瓦などの道戸瓦は外濠から多く出土している。

今回の調査では、藤原宮南面大垣・内濠・外濠を同時に検出することができた。宮の南面外郭については、第1次調査で南面中門と内濠、外濠が明らかになっている。南面中門心と内濠・外濠間の心々距離を求めるとき、各々11.5m、20.3mの数値が得られる。一方、今調査地では、南面大垣と内濠間が11.65m、外濠間が24.75mとなる。第1次調査の成果と比べて、大垣と内濠間の距離には大差ないが、外濠とでは、今回の調査区の方が約4.5m広くなっていることがわかる。従って、第1次調査区と今回の調査区を結び、大垣・内濠・外濠の振れを求めるとき、大垣・内濠が方眼方位に対し、西で約46°南に偏しているのに



外濠出土人形



軒平瓦実測図(1:4)

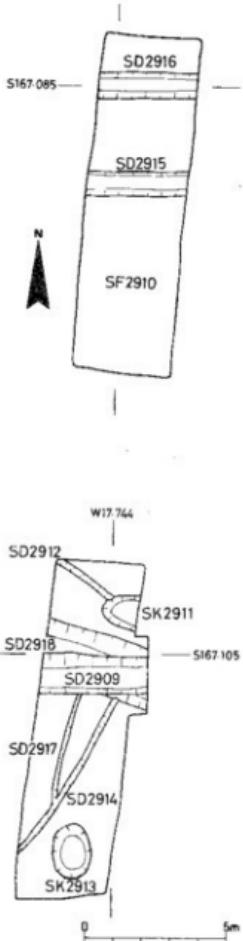
対し、外濠は、 $1^{\circ} 37' 57''$ 偏することになる。南面大垣と外濠間の距離が南面中門以西で徐々に広がっていくのか、或いは、その広がりが宮の南西隅に近い当地域だけの現象であるのかの解明については今後の調査を待ちたい。

第29-7次調査 この調査は、六条大路の検出を目的とし、第29-6次調査区の南約35mと55mの地点に各々東西幅3mの調査区を設定した。南区は南北12m、北区は南北10mである。調査区の層序は両調査区とも表土、耕上、暗褐色土の順になり、暗褐色土層は弥生式土器包含層である。遺構はこの暗褐色土層の上面で検出した。

南区の遺構には、藤原宮期の東西溝SD 2909と弥生時代の溝SD 2912・2914・2917・2918、土壙SK 2911・2913、それに中世の小溝がある。藤原宮期のSD 2909は幅1.6m、深さ0.2mの素掘りの溝である。堆積土は2層に分かれ、上層から土師器、須恵器が少量出土した。弥生時代の遺構のうち、溝SD 2918は藤原宮期の溝SD 2909の下にあり、幅2.1m、深さ1.2mの斜行溝である。上壙SK 2913からは畿内第Ⅲ様式、そのほかの遺構からは畿内第Ⅴ様式の弥生式土器が出士した。

北区の遺構には藤原宮期の溝SD 2915・2916がある。SD 2915は幅0.8m、深さ0.2m、SD 2916は幅0.85m、深さ0.2mである。両溝からはとともに藤原宮期の土器が少量出土した。

今回の調査で検出した3条の東西溝のうち、南区にあるSD 2909を、その位置からみて六条大路(SF 2910)の南側溝とすることはほぼ誤



第29-7次調査遺構配置図(1:200)

りないものと思われる。一方、北側溝については、その想定位置付近にはほぼ同規模の SD 2915・2916があり、いずれとも判断がつきかねる。南側溝 SD 2909 と SD 2915・SD 2916との心々距離はそれぞれ17.3 m, 20.8 mとなる。六条大路の幅員については、市道拡幅工事に伴う工事区の壁面調査によって、側溝心々距離で約20mの数値が得られている。(第21-2次調査、概報8)。その数値を考慮すれば、SD 2916を北側溝とすることもできる。しかし、SD 2916とSD 2915の関係を六条大路幅員の拡大、縮小の結果と考えることもできるので、六条大路の北側溝の確定は今後の問題としたい。仮に六条大路北側溝をSD 2916とすると、大垣と六条大路間の心々距離は70.8 m, SD 2915とすると72.55mとなる。また南外濠から六条大路までの墻地はSD 2916を北側溝とすると南北幅約32m, SD 2915を北側溝とすると約36mとなる。

第29-1・5次調査 この調査は、六条大路と西二坊坊間路との交差点及び右京七条二坊北西坪内の遺構を明らかにすることを目的とした。調査地は第29-7次調査南区の西方約50mの場所である。調査は2次にわたるが、調査区は東西に接しており、西区(第29-1次)が東西15m, 南北32m, 東区(第29-5次)が東西35m, 南北23mの範囲である。

調査区の層序は上から耕土, 床上, 灰褐色粘質土, 茶褐色砂, 赤褐色土, 暗灰色粘土, 暗青灰色粘土, 灰色粘土となり, 地表下1.15mにある灰色粘土層は弥生式土器の包含層である。

調査の結果、藤原宮期の遺構としては、灰色粘土層の上面で土壌SK 2905を検出したのみである。SK 2905は調査区の南端にあり、一部調査区外に広がる。東西1.8 m, 南北1.5 m以上, 深さ0.4 mの規模である。このほかに、暗灰色粘土層の上面で、東西・南北方向の小溝を検出したが、いずれも中世以降のものと考えられる。

この調査地では、藤原宮期の遺構は土壌のみであった。当初予測された西二坊坊間路は遺存していない。土層の堆積状況からみて、藤原宮期の遺構は、飛鳥川の氾濫等により、削平されたものと判断される。なお、六条大路については、第29-7次調査結果から、調査区の北方にあることが判明している。

藤原京右京五条三坊の調査（第28次）

（昭和54年11月～昭和55年3月）

この調査は、藤原京内を通過する国道165号線樋原バイパスの建設工事に先立って実施したものである。国道165号線バイパス関係の調査としては2年目にあたり、先に第25次調査を実施している（概報10）。今回は第25次調査地の南方にL字状の調査区を設定して調査を行った。調査地は藤原京右京五条三坊北東坪と北西坪の想定地にあたり、西三坊坊間路の存在が予想された。従って調査の目的は、西三坊坊間路および坪内の遺構を明らかにすることにあった。

調査地の層序は、上から耕土、床土、暗灰褐色粘質土、灰褐色粘質土、暗褐色土、暗褐色砂質土の順になり、暗褐色砂質土は弥生式土器の包含層である。地表下約1.3mの暗褐色土層上面で藤原宮期の遺構を検出したが、暗褐色土は調査区東端から約40mの所でなくなり、それ以西は下層にあたる暗褐色砂質土上面で遺構を検出した。

検出した遺構の時期は、藤原宮期、奈良時代、弥生時代、中世以降、その他



調査位置図 (1 : 2500)

に区分されるので、ここではその区分に従って説明する。

藤原宮期の遺構 西三坊坊間路 SF 2740 のほかに掘立柱建物 SB 2750、掘立柱塀 SA 2746、井戸 SE 2743・2747、土壙 SK 2751・2752がある。井戸 SE 2747以外の遺構はいずれも右京五条三坊北東坪で検出した。



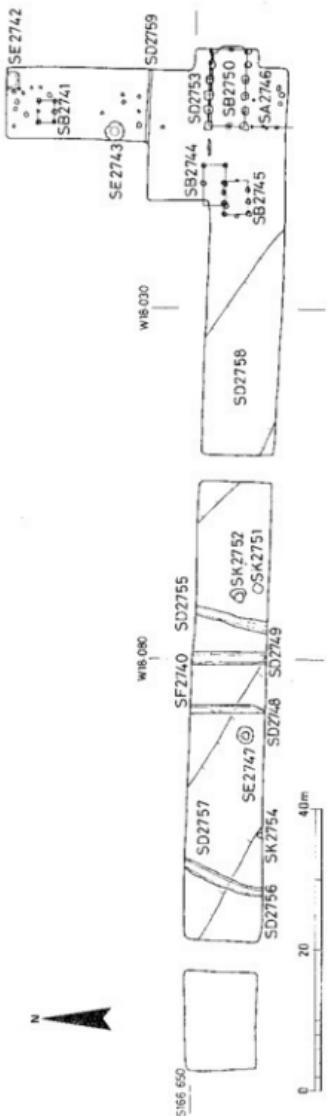
調査地全景（北東から）

西三坊坊間路 SF 2740 は、調査区のほぼ中央にある。南北溝 SD 2749・2748 はその側溝である。SF 2740 は側溝心々距離で 7.3 m、路面幅が 5.7 m となる。西側溝 SD 2748 は幅約 1.5 m、深さ 0.15 ~ 0.35 m、東側溝 SD 2749 は幅約 1.7 m、深さ 0.2 ~ 0.6 m の素掘りの溝である。両溝からは藤原宮期の土器が出土した。なお、坊間路と坊内を画する塀などの遺構はみられなかつた。

SB 2750 は調査区南東隅にある。桁行 5 間、梁行 2 間の東西棟建物である。一部の柱は抜取られている。柱間寸法は梁行が 2.1 m 等間、桁行が 2.25 m 等間に復原できる。側柱列の柱掘形は一辺 0.8 ~ 1.2 m の方形をなし、深さは 0.6 m である。東と西の妻柱の柱掘形の底には根固め石として 1 ~ 3 の石が置かれている。この建物の方位は方眼北に対して、わずかに西に偏している。なお、南東隅の柱抜取り穴からは土師器の甕が完形で出土した。SB 2750 の西妻柱列に柱筋をそろえて、南北塀 SA 2746 がある。2 間分を検出したが、さらに南へ延びる可能性も残る。おそらく、SB 2750 の日隠し塀であろう。

東西溝 SD 2753 は SB 2750 の北側柱の掘形と重複する東西溝である。幅 0.4 m、深さ 0.3 m の規模をした素掘りの溝で、SB 2750 よりも古い。溝内からは藤原宮期の土器が出土している。この溝の北方約 8 m にも同規模の東西溝 SD 2759 がある。これらの溝の性格は不明である。

井戸 SE 2743 は、SB 2750 の北方 13 m にある。掘形は井戸枠抜き取り時に壊され、規模は明らかでない。抜取り跡の平面形は円形を呈し、径 3.0 m、深さ



第28次調査遺構配図 (1 : 800)

は 1.95 m ある。埋土からは 7 世紀前半から 藤原宮期に至る土器が出土した。

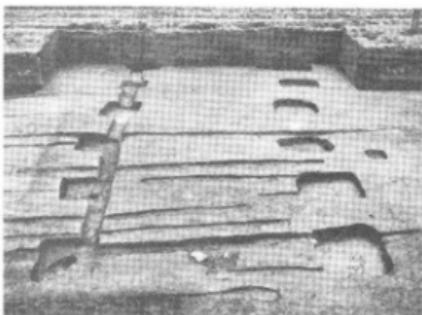
井戸 SE2747 は西三坊坊間路の西側溝の 西 4 m にある。直径 1.8 m, 深さ 1.6 m の 規模をした掘形の中に内法方 0.6 m の横板 組み井戸枠が残る。井戸枠は縦 35 cm, 横 75 cm, 厚さ約 2 cm の板を三段に積み重ねたも ので、四隅には支柱が立てられている。井 戸底には楕円形曲物の側板を据え、その周 囲には小礫を敷きつめている。

土壙 SK2751・2752 は西三坊坊間路東側 溝の東約 10 m にある。平面形はいずれも不 整円形をなし、SK2751 は径 1.7 m, 深さ 0.3 m, SK2752 は径 2.0 m, 深さ 0.2 m の 規模である。埋上には小礫や焼土が含まれ、 藤原宮期の土器が出土した。

奈良時代の遺構 調査区北端で検出 し た井戸 SE2742 がある。井戸枠は抜き取 られ、掘形の形状も不明である。抜取り跡の 平面形は方形で、東西 2.4 m, 南北 2.0 m 以 上の規模となり、深さは 1.7 m である。 埋土からは奈良時代中頃の土師器皿、甌、 横瓶のはか土牛、木製品が出土した。

弥生時代の遺構 上壙 SK2754, 斜行 溝 SD2755・2756, 河川状遺構 S D2757・ 2758 がある。上壙 SK2754 は調査区西方の 南端にあり、平面形は不整円形をなし、径 1.1 m ある。SD 2755・2756 は南西から北

東方向に流れる斜行溝で、SD2755は幅約1.6m、深さ約0.6m、SD2756は幅約2.0m、深さ約0.5mある。河川状遺構SD2757・2758は南東から北西方に流れるもので、幅は各々12mと17mである。これらの遺構からは、いずれも畿内第V様式の弥生式土器が出土している。



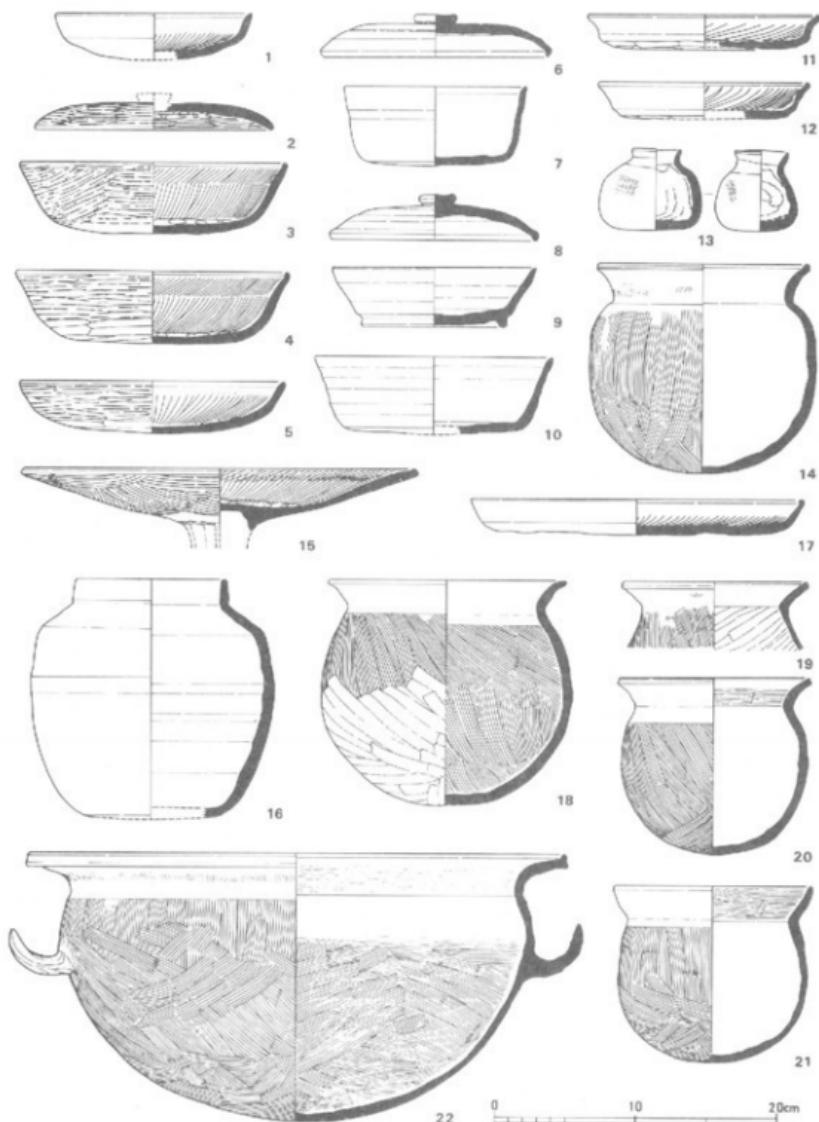
SB2750（西から）

その他の遺構　掘立柱建物SB2741・2744・2745がある。SB2741は調査区の北端にある桁行2間（総長3m）、梁行1間（2.4m）の東西棟建物である。SB2744・2745はSB2750の西にある東西棟建物で、柱掘形の重複関係からみて、SB2744が新しい。SB2744は桁行2間（総長5.7m）、梁行1間（3.0m）である。SB2745は桁行3間、梁行2間の建物で、柱間寸法はともに1.8m等間である。このほかに、南北、東西方向に掘られた小溝を多数検出したが、いずれも中世以降のものである。

ここに述べた3棟の建物は、柱掘形から遺物が出土していないことや建物の方位が藤原宮期の建物SB2750の方位とも一致しないことから、その時期については不明である。ただ、今回の調査地の東方にあたる藤原宮西方官衙地域では掘立柱建物からなる7世紀後半の集落が明らかになっており、今回検出した建物はその集落の一部を構成する可能性もある。

出土遺物　瓦埠類、土器、土製品、木製品がある。瓦の出土量は少なく、いずれも小片である。軒平瓦には三重弧文のはか6646E・6641H型式、軒丸瓦には6276A・6275E・6271A型式がある。このほかに熨斗瓦、埠が出土した。

上器では弥生時代（畿内第V様式）から中世（瓦器・土師器）に至るものが出土地でいる。ここでは藤原宮期と奈良時代の上器を図示した。1～7・15はSK2751、8・9・16はSE2747、10・17～22はSE2743、11～14はSE2742から出土したものである。このなかでもSE2742出土土器は平城宮Ⅲ段階に属



出土土器实测图

するものと思われる。

本製品では曲物、付札状木製品、土製品には土牛がある。土牛は、奈良時代の井戸 SE2742から出土した。土牛は左後肢部分の破片であるが、牛の顕著な特徴である蹄および突起する足根部を入念に作り出して表現している。

奈良時代の土牛の出土例としては、大

阪府羽曳野市茶山遺跡（『羽曳野市文化財調査報告書』4 昭和54年）に次いで2例目であり、注目される。

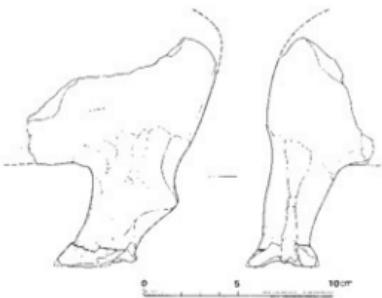
まとめ 今回の調査ではバイパス建設工事に伴う路面敷の調査であったため、坪内の利用状況を明らかにするまでには至っていないが、藤原京右京五条三坊にある西三坊坊間路と北東坪に配置された建物・井戸を明らかにすることことができた。北東坪では坊間路寄りに建物ではなく、坊間路心の東方80mの地点、すなわち西三坊大路寄りに東西棟建物と井戸が配置されている。

また、この地域では奈良時代の遺構（SE2742）が明らかになった。藤原宮の西方では、宮西面外濠が11世紀後半まで水路として機能し、近くに藤原宮期以後の集落の存在が推定されていたが（第23～5次調査、概報10），今回井戸を検出したことによって、この地域における藤原京以降の土地利用のあり方を探る手懸りが得られた。

なお、今回明らかになった西三坊坊間路の路心を国土方眼座標で示すと、

$$X = -166,655.000 \text{ m}$$

$$Y = 018,083.650 \text{ m} \text{ となる。}$$



井戸 SE2742出土土牛実測図

藤原京左京五条四坊の調査（第29—17次）

（昭和56年1月）

この調査は膳夫町と南浦出屋敷町を結ぶ市道の拡幅工事に伴う事前調査である。工事は昨年度施工区間（第27—14次調査。四条条間路・四条大路を検出。概報10）の南200mの間にについて実施されるもので、調査はこのうち五条条間路想定位置を中心に南北39m、東西1.9mの調査区を設けて実施した。

調査区の層序は、上から耕土、床土、暗灰色粘土、黄色粘土となる。遺構検出面である黄色粘土層上面は南に向って次第に高くなりながら香久山の山裾に連なっている。調査の結果、五条条間路とその北側溝のはかに散在する柱穴3を検出した。北側溝は幅1.2m、深さ0.5mの素掘りの東西溝で、溝埋土の暗褐色粘土からは藤原宮期の土器少量と馬齒片が出土した。溝は路面側にあたる南壁が垂直に近く掘られており、この状況は従来の知見と一致している。また、南側溝については精査したが検出されなかった。今回検出した五条条間路北側溝とこれまで2カ所で判明している北側溝の成果とから、その振れを求めるとき、五条条間路北側溝は方眼方位北に対して、西に約42°振れていることになる。

なお、調査区北方の工事立会の際、条間路北側溝の北方約40mの位置に幅15m、深さ1.6mの素掘りの東西大溝を発見した。溝の断面観察によると、この溝は多量の流水があったというよりはむしろ、滯水状況を示している。四条大路と五条条間路との間では、本調査区の北西方約330mの位置にも幅9m、深さ1.7mの東西大溝（第21—2次、概報7）を確認している。両者の関連およびその性格の解明については今後の調査を待ちたい。



調査地位図（I : 3000）

藤原京左京九条三坊・十条三坊の調査（耳成線第1次）

（昭和55年10月～昭和55年11月）

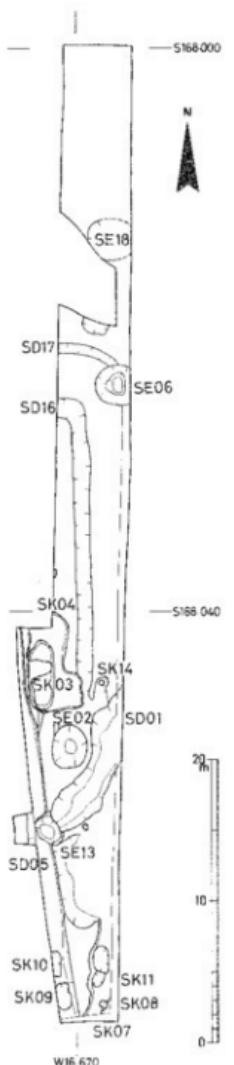
この調査は、樅原市出合町から明日香村に至る村道（国道165号～耳成線）改良工事に先立って、明日香村域で実施したものである。調査地は大官大寺の西方、小山集落の東方約70mの水田である。また、この地域の水田は、通称ギオ山の山裾部にあたり南から北に向かってやや傾斜している。

調査地は藤原京の推定条坊では左京九条三坊、十条三坊にあたることから、今回の調査では九条大路および坊内の遺構の検出が期待された。なお調査対象地は南北230m、東西12mの道路敷地であるので、南北方向に長い調査区を3区（南・中・北）設定して、調査を行った。

調査区の層序は南区の南半と北半では異なっている。南区南半の層序が耕上、床土、茶褐色土、黄褐色土、淡黄褐色土（地山）となるのに対して、それ以北では、床土直下に整地土である黄褐色土がみられ、以下暗青灰色粘土、黒灰色粘土となる。この整地土は厚さ0.6～1.5mあり、南区の北半から北区北端までの間、南北約180mにわたって連続して存在しさらに北に続くものと考えられる。整地土の土質は南区南半の黄褐色粘土や地山と類似する。また整地土の上面は南端と北端では1.65mの



調査地位位置図 (1 : 3000)



南区遺構配置図 (1 : 400)

比高差があり、南から北へ傾斜している。整地土から少量の上師器・須恵器のはか、円筒埴輪が出上した。

整地土下の暗青灰色粘土面と整地土面で遺構を検出したが、南区南半では黄褐色粘土面と地山面で検出した。整地土と黄褐色粘土層上面で検出した遺構には、中世以降のものと7世紀代のものがある。従って、ここでは暗青灰色粘土ないし地山上面で検出した遺構をA期、整地上と黄褐色粘土層上面で検出した遺構のうち7世紀代のものをB期、中世のものをC期と大別し、各調査区ごとに説明する。

南区の遺構 A期の遺構には調査区北端で検出した弥生時代の上塙 SK 07~11がある。いずれの土塙からも、畿内第V様式上器が出上した。

B期の遺構には井戸 SE 02・06、溝 SD 01・05、土塙 SK 03・04がある。

井戸 SE 02 は深さ 2.2 m あり、岩盤まで掘込まれている。井戸枠は抜取られており、下層に岩盤の崩壊土、上層にカーボンを多く含む暗灰褐色土が堆積していた。埋土の上層からは銅鋌、フイゴの羽口、重弧文軒平瓦、土器、馬の四肢骨が出土した。井戸 SE 06 の井戸枠も抜取られており、抜取り跡は平面形が径 2.4 m の円形を呈し、深さは 2.8 m ある。井戸内からは、重弧文軒平瓦、土師器、須恵器が出上した。

斜行溝 SD 01 は SE 02 の南東にあり、西には続かない。幅 1.6 ~ 2.5 m、深さ 0.8 m あり、堆積土は 2 層に大別される。下層からは北西岸から投棄された状況で重弧文軒平瓦、平瓦、銅鋌、建築部材、土器が出上した。南北溝 SD 05 は、幅 1.8 m、深さ 0.4 m の規模

で長さ28mにわたって検出した。堆積土は2層に大別され、重弧文軒平瓦が1点出土した。土壤SK03・04は重複しており、SK03が新しい。SK03は平面橋円形を呈し、長径4.8m、短径2.3m、深さ0.2mある。土壤内には銅滓を含む焼土が充満していたが、壁面は焼けていない。付近に炉址の存在が予想されたが、調査区内には検出されなかった。SK04は南北7m、東西4mの不整形な土壤で、深さ0.2m～0.3mある。上器小片のほか馬の下顎骨が出土した。

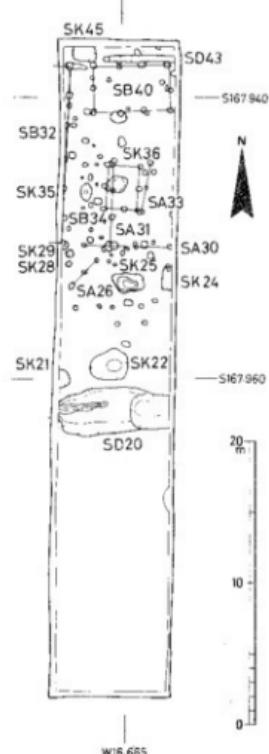
C期の遺構としては井戸SE13・18、溝SD16・17、土壤SK14がある。井戸SE13は、深さ2.5mの石組み井戸で、埋土からは青磁片が出土した。SE18は平面が円形を呈する井戸と思われるが、その大半が崩壊しているため、本来の形態・規模は不明である。

SD16・17はギオ山の山裾をめぐると考えられる溝である。ギオ山には中世の山城の存在が想定され、或は山城に関連する施設とも考えられる。

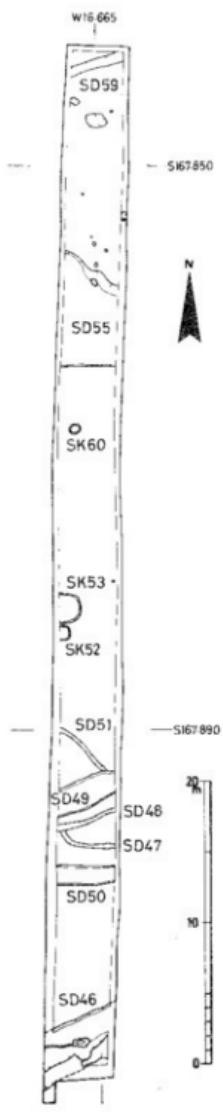
土壤SK14は径0.9mの円形を呈する土壤で、深さが0.6mある。最下部に小石を敷き、曲物側板の痕跡を側壁に残している。この曲物内に石が2段に積み上げられ、細長い河原石が1石中央部に落込んでいた。副葬品などはみとめられなかつたが、立石を伴う埋葬施設ではないかと思われる。

中区の遺構 C期の小溝のほかは全てB期の遺構であり、掘立柱建物3、掘立柱塀4、溝2、土壤9と小穴がある。

SB40は桁行3間、梁行2間の東西棟建物で、柱間寸法は桁行が1.8m等間、梁行が1.65m等間となる。柱掘形は一辺0.5m前後の隅丸方形で、いずれも柱痕跡を残す。SB32は南北棟建物で、桁行6間分を検出した。柱間寸法は2.1m等間で



中区遺構配置図 (1 : 400)



あり、東側に3間の目隠し塀 SA 31が伴う。SB 34は桁行2間、梁行1間の南北棟建物で、柱間寸法は2.1m等間である。柱掘形の重複関係から、SA 31より新しい。SA 33はSB 34の東にある南北2間の塀である。重複関係から、SB 34より古い。SA 26は2間の塀で、方眼方位北に対して約45°東に偏している。

東西溝 SD 20は、幅約3m、深さ約0.5mの素掘りの溝である。溝からは飛鳥IV・V段階の土器が出土した。東西溝 SD 43は幅0.6m、深さ0.4mの規模で、断面形はU字形を呈する。溝からは飛鳥IV段階の土器が出土した。また、この溝はSB 40の柱掘形を切っており、SB 40より新しい。

土壤には、深さ0.4~0.7mで埋土に炭化物をわずかに含むもの（SK 22・25・35・36）と深さ0.1m前後で皿状の断面形を呈し、炭化物を多く含むもの（SK 21・28・29・45）がある。土壤 SK 22・35・36・45からは飛鳥III段階からIV段階の土器が出上している。

なお、SK 29は重複関係からみて、SB 32より新しい。

以上のように、B期の遺構は地割の区画と考えられる東西溝 SD 20の北に集中しており、時期的には7世紀第IV四半期の遺構が多い。しかし、重複している遺構も多く、建物・塀の方位には方眼方位北に対して東へ偏するもの（SB 32・34、SA 30・31・33・26）と西へ偏するもの（SB 40）との2群があるなど、これらの遺構がさらに時期的に細分される可能性が強い。

北区の遺構 A期の遺構には弥生時代の斜行溝SD 49・55・59、古墳時代の斜行溝 SD 46~48・51、時

北区遺構配置図 (1:400) 期不明の土壤 SK 52・53がある。斜行溝 SD 46は幅3

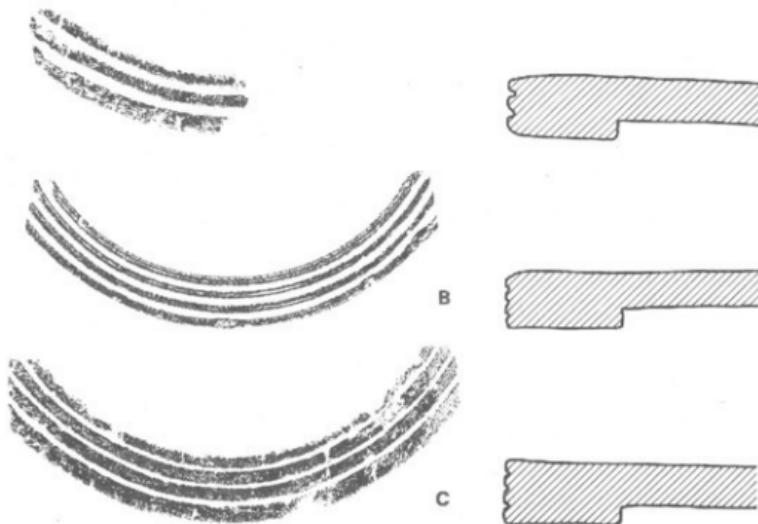
m、深さ 0.4 m の規模で、中からは 6 世紀後半と推定される土器が出土した。

B 期の遺構には土壙 SK 60 と東西溝 SD 50 がある。SK 60 の平面形は径 0.7 m の円形を呈し、深さは 0.2 m ある。埋土は整地土と同質の黄褐色土であり、中から飛鳥 II 段階の土師器が出土した。

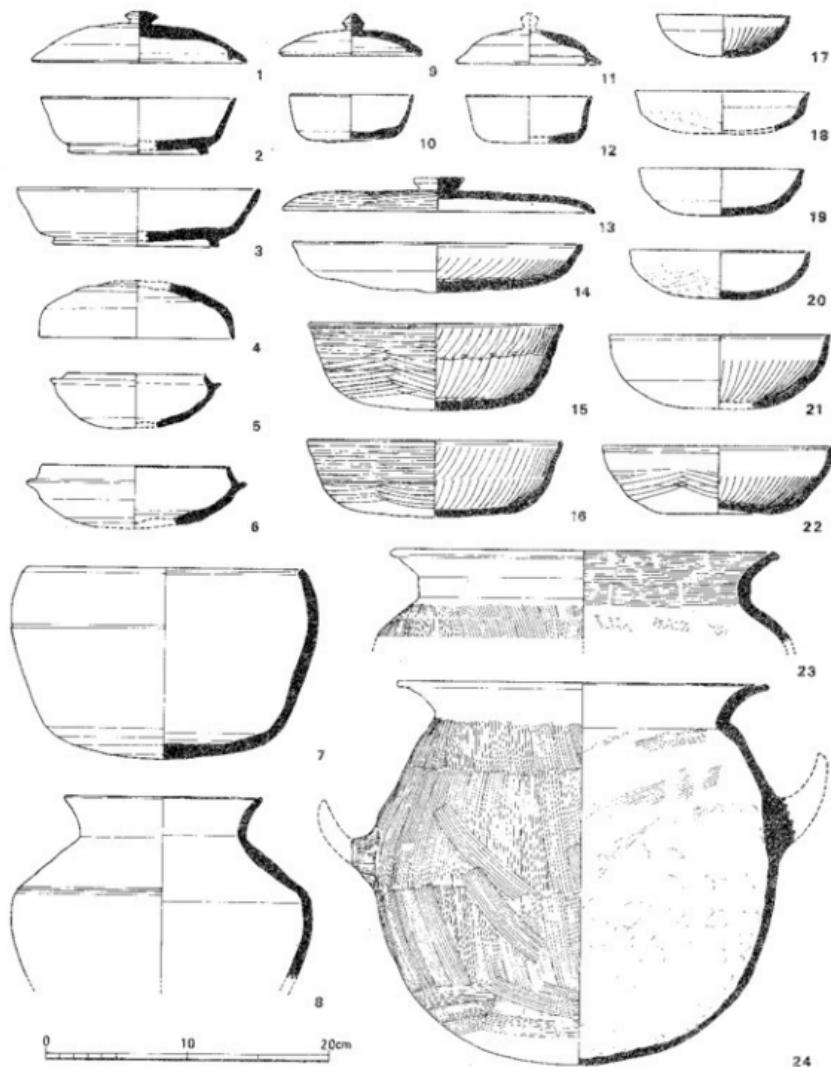
東西溝 SD 50 は幅 2.5 m、深さ 0.8 m の素掘りの溝である。溝内からは飛鳥 IV ないし V 段階と考えられる土師器が出土した。この溝は九条大路南側溝の位置にあたるが、北側溝に相当する溝は、調査区内では検出していない。調査区の東方にある大官大寺下層で検出した溝 SD 517（概報 10）を北側溝とすれば、側溝心々距離は約 14.7 m となる。

出土遺物 瓦、土器、木製品、金属製品などがあり、弥生時代から中世に至るもののが含まれている。

瓦は軒丸瓦 9 点、軒平瓦 53 点、熨斗瓦 33 点、面戸瓦 4 点のほか丸・平瓦がある。軒瓦では大官大寺所用瓦 6231 型式 9 点、6661 型式 7 点のほかはいずれも重弧文軒平瓦である。重弧文軒平瓦には三重弧文 3 点、四重弧文 47 点がある。後



南区出土軒平瓦実測図 (1 : 4)



出土器物 (灰土: 1·2·10·12, 灰地土: 5·11·18·19, 灰青灰色粘土: 4, SD20: 3, 8, SE02: 6·15·21·23, SD 01: 7, SK22: 9, SK60: 17·22, SD43: 13·20, SD50: 14, SK45: 16, SK35: 24)

者は施文具の違いにより四種に細分でき、ここではB・Cを図示した。また、平瓦には凸面布目のものが比較的多く認められる。

上器は7世紀代の土師器・須恵器が出土量の大半を占めている。図示した土器のうち、整地上から出土した須恵器（5）や整地土下から出土した土器は飛鳥Ⅰ段階に近い様相を示している。また、土壤SK60出土の土師器（17・22）は、坂田寺跡池SG100出土土器と共に特徴を示しており、これらの土器は飛鳥Ⅱ段階と考えられる。

木製品ではSE02から曲物、整地土下から漆製品が出土した。

まとめ 今回の調査では、当地域内で7世紀前半に大々的に整地事業が行われた事実を確認するとともに、7世紀後半の建物、井戸等を検出した。

整地上は、0.6～1.5mの厚さで南北の長さは180mに及んでいる。これまでの調査で大官大寺寺域内にも同様の整地上を確認しており（概報4），これらの整地上が一連のものとすると、東西の範囲は長さ約100m以上となる。整地の行われた時期は、整地土上面から掘込まれた土壤SK60出土土器や整地土及びその下の暗青灰色粘土層出土土器から7世紀第Ⅱ四半期頃と推定される。以上のように出土土器の示す年代観と整地が大規模であることを考慮し、整地の要因を宮都の造営に結びつけるとすると、舒明天皇の「飛鳥岡本宮」或は齊明朝の「後飛鳥岡本宮」の造営との関連も考えられ興味深い。

7世紀後半の造構のうち、藤原京関係の造構としては、九条大路の南側溝と推定される溝1条のみで、その他の造構は藤原京に先行する時期のものと考えられる。建物の配置やその性格等については不明な点が多いが、大官大寺下層においても7世紀の建物や井戸が明らかにされており、それらの造構と一連のものと考えられる。また、出土した瓦のうち、大官大寺所用瓦ではない重弧文軒平瓦が50点出土したことは注目される。これらの瓦から調査地付近に瓦窯あるいは大官大寺より古い寺院の存在が推定されるようになった。

以上のように、この調査は道路敷部分という限定された調査ではあったが、上にみたような多岐にわたる問題が提起された。さらに今後周辺地域の調査の進展を待って検討したい。

大官大寺第7次の調査

(昭和55年7月～昭和55年12月)

第7次調査は、伽藍北辺部の状況を探ること、寺域北限の施設の手懸りを得ることなどを目的として実施した。調査地は講堂の北方60～130mの地点で、南北70m、東西15mの調査区を設定した。調査区は畦畔によって南・中・北の3つに分かれており、調査の過程でそれぞれ一部を西に拡張し、北区では東にも拡張区を設けた。



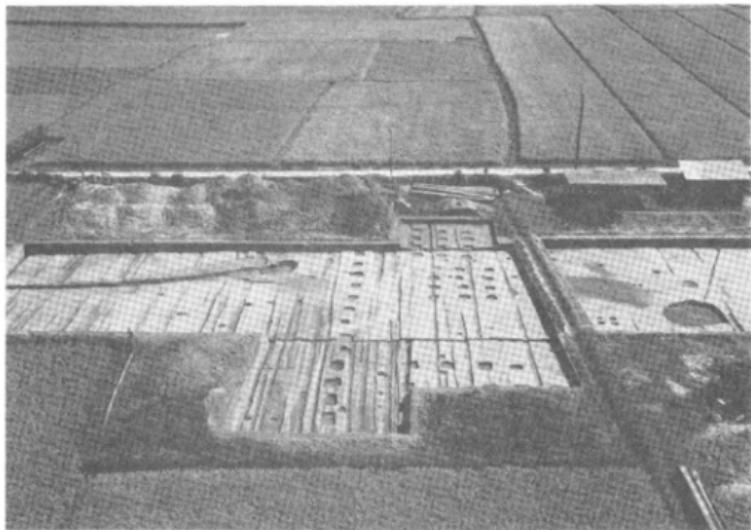
調査地位置図 (1 : 3000)

調査区の基本的な層序は、耕土、床土、黄褐色砂質土、灰褐色粘質土となる。黄褐色砂質土は、中区北半から北区南半にかけてみられた土層であり、その他の地区には見られない。従って遺構検出は、黄褐色砂質土層上面又は、灰褐色粘質土層上面で行った。

調査の結果、寺域北限を画したと考えられる掘立柱塀のほか、掘立柱建物、井戸、土壌などを検出した。遺構の時期は大官大寺期、大官大寺造営前、その他に区分されるので、ここではその区分に従って説明する。

大官大寺期の遺構　掘立柱塀 SA 600、掘立柱建物 SB 570・590・591、SB 595、井戸 SE 580、土壌 SK 604、溝 SD 597などがある。

東西塀 SA 600 は北区の中央にある掘立柱塀で、総長約24mにわたって13間分を検出したが、さらに東と西に延びていると思われる。柱掘形は0.8～1mの方形で、全てに柱痕跡が残る。柱間寸法にはばらつきがみられ、特に東から5間分はそれが著しい。これを除けば柱間寸法はほぼ1.84m等間となる。SA 600と想定伽藍中軸線との交点は西から2間目にあたる。SA 600を寺域北限

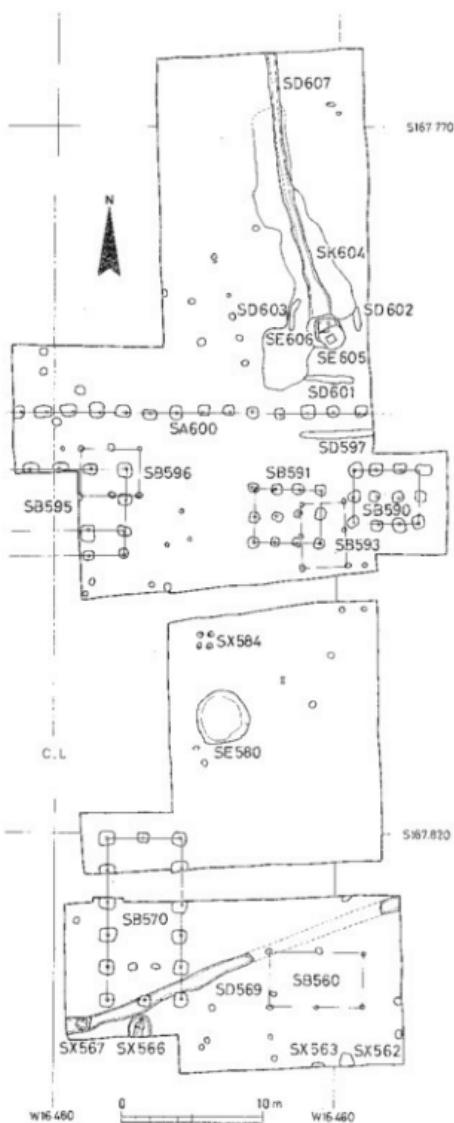


調査地北半全景（西から）

の崩とすれば、この地点に北門などの遺構が存在したとも考えられるが、門の遺構は検出されなかった。また崩に伴う基壇、雨落溝に該当するような遺構もない。この崩を寺域北限の施設と考えると、崩は九条条間路推定路心から南へ約29mの位置になる。

南北棟建物 SB 570 は南区西端にあり、桁行5間・梁行2間の規模である。柱掘形は0.8~1mの方形であり、3つの掘形には柱根が、他の全ての掘形には柱痕跡が残る。柱間寸法は桁行では2.20~2.40m、梁行では2.58~2.65mあり、平均すると各々2.31m、2.60mとなる。柱根のうち南東隅のものは、遺存状況が良好で柱径は23cmほどあり、長さ80cmにわたって残っている。根がらみなどの痕跡はみられない。

東西棟建物 SB 590・591は北区南端部で検出した掘立柱建物で、2棟は南北に1.5mずれて、東西に並んで建つ



第7次調査遺構配置図 (1 : 400)

ている。ともに桁行3間、梁行2間の総柱建物である。柱掘形は、SB 590は0.8mほど、SB 591は0.6mほどとやや小さい。柱間寸法にはばらつきが著しく、確定しにくいが、平均値を求めればSB 590は桁行が中央間1.68m、脇間1.48m、梁行は1.92m等間、SB 591は桁行中央間1.60m、脇間1.53m、梁行は南柱間が1.98m、北柱間が1.73mとなる。SB 591の北西隅柱穴とその東隣の柱穴には、根固め石と考えられる石が据えられていた。

東西棟建物SB 595はSA 600の南4mにある南廡付建物である。梁行3間、桁行3間以上の規模になるが建物はさらに西の未発掘地に延びていると考えられる。北側柱柱列の柱筋は、東方にある建物SB 590の北側柱列の柱筋とそろっている。柱掘形は身舎では方1m、廡では方0.6mで廡部分の柱掘形が小さい。全ての柱穴で柱痕跡を確認したが、それらは径約20cmほどで身舎と廡との間には大小の差はない。柱間は梁行が身舎では2.225m等間、廡は1.725mある。桁行はばらつきがあるが、端間2.54m、中央間2.21mとなり、端間が少し広いと考える方が妥当のようである。

SE 580は中区の中央にある井戸で大官大寺の時期と考えられるが、後世に井戸枠は抜取られ、一気に埋められていた。この埋土からは種先瓦1点が出土した。井戸掘形は径3.5mほどあり、掘形と井戸抜取穴とがほぼ重複している。

上塙SK 604は塙SA 600の北にある。南北約20m、東西約4mの不整形な土壌である。土×からは大官大寺期の土器が出土した。溝SD 597はSA 600の南1.5mにある素掘りの東西溝である。深さは約0.2mあるが、西へは続かない。このほかに大官大寺期の遺構としては南区南端に2つの柱掘形状の落込みSX 562・563を検出したが、その性格は不明である。

大官大寺造営前の遺構 井戸SE 605・606、溝SD 569・601～603、SD 607がある。これらの遺構のうち溝SD 569以外の遺構は、北区中央東寄りに集中している。また、井戸SE 605とSE 606との間には重複関係があり、SE 606が古い。

井戸SE 605は一辺1.5mの隅丸方形を呈する掘形に井戸枠を据えたもので、検出面からの深さは約1mある。枠組の上半部は抜き取られていた

が、高さ60cmほどが遺存する。内法が一辺52.5cmの小形井戸で、周囲には井戸枠を固定するために人頭大から拳大の石が配置されていた。枠板の厚さは3cmあり、北側は2枚積み上げているが、他の三面は一枚板である。東を除く三面の枠板の上端中央部には太納穴がある。井戸からは、多量の土器小片、小刀状木製品、桃や瓢箪などの植物遺存体が出土した。また、井戸の抜取跡からも少量の土器と瓦が出土した。



井戸SE 605(北から)

SE 606は井戸枠の土居が遺存しているのみである。土居から約30cm上方で確認できた井戸掘形の平面形は、一辺1.6m前後の隅丸方形をなす。土居の内法寸法は東西が63cm、南北が70cmあり、組手部分を込栓で止めている。材は幅5.5cm、厚さ6~9cmの角材である。東材の下端には井戸土居とは無関係の切欠きがあるので、転用材である可能性が考えられよう。土居と井戸枠の接合方法を示す痕跡はなく、上部は不明である。土居枠内からは、多量の土師器と須恵器の小片、桃核・瓢箪などの植物遺存体が出土した。

また、井戸の東・南・西にはそれぞれSD 602・601・603があり、井戸を方形に取囲む様相を呈している。これらの溝は井戸屋形のような遺構に伴う溝の可能性があるが、井戸周囲には建物遺構はみられなかった。

斜行溝SD 607は南から北に流れる素掘りの溝である。幅0.7m~1.5m、深さは0.4m前後である。井戸枠が抜き取られているので井戸との新旧関係は不明であるが、この溝は井戸より南には延びないことから、井戸の排水施設とも考えられる。井戸SE 605・606からは飛鳥IV段階、溝SD 607からは飛鳥III・IV段階の土器が出土した。

このほかに南区には斜行溝SD 569がある。重複関係から、大官大寺期の建

物 SB 570 より古い溝であるが、出土遺物が皆無のため、時期は不明である。

その他の遺構 調査区に散在する掘立柱建物と小柱穴、礎石落し込み穴および中世以降に掘られた小溝がある。建物 SB 560・593・596 はいずれも桁行2間、梁行1間の小規模な建物で、柱掘形も小さい。建物のはかに、中区の北西隅には SX 584 がある。柱痕跡の残る柱掘形が4個集中しているが、その性格は不明である。これらの遺構の時期は、重複関係から中世の小溝よりも古いことは明らかである。また、SB 593・596 の北方からは平安時代の土器が出土しているので、これらの建物は平安時代のものとも考えられるが、今ひとつ決め手を欠く。

南区の南西隅には2カ所の礎石落し込み穴 SX 566・567 がある。いずれも花崗岩の礎石が落し込まれており、発掘区に南接する地区に礎石建物の存在が想定される。礎石落し込み穴の埋土と中世以降の小溝の埋土が類似していることから、礎石が落し込まれたのは、中世以降と考えられる。

出土遺物 瓦、土器、木製品（小刀状木製品）、金属製品（鉄釘）がある。瓦類の出土は極めて少ない。軒丸瓦、軒平瓦の破片は12点であり、駁斗瓦2点、樋先瓦1点である。丸・平瓦の出土は僅少である。SE 580 から出土した単弁八弁樋先瓦は、勝夫寺出土と伝えられる軒丸瓦（保井芳太郎『大和上代寺院志』昭和7年）と同范と考えられる。この軒丸瓦の外区を取除き、中央に釘穴を穿つと、今回出土の樋先瓦と同型になる。

出土土器には縄文時代から中世に至るもののが含まれているが、量的には7・8世紀の土器が多い。大官大寺期の土器は、土壤 SK 604 からやまとまって出土した。SE 605・606 出土土器は飛鳥IV段階に属するものである。出土器種をみると、甕・壺類がほとんどを占め、杯・皿類が極端に少ないことが注目される。

まとめ 今回の調査によって、寺域北辺部の実態の一部が明らかになった。



井戸 SE 580 出土樋先瓦 (1 : 3)

SA 600 は寺域北限を画する堀と考えられ、そのすぐ南に接するように、伽藍のほぼ中軸線上に南廻のつく東西棟掘立柱建物があり、その東には倉庫と考えられる 2 棟の縦柱建物 SB 590・591 が並ぶ。さらに南には井戸 S E 580 をはさんで約 20m の位置に 2 × 5 間の掘立柱南北棟がある。この地域からの瓦の出土量が少ないとからこれらの堀や掘立柱建物はいずれも瓦葺ではなく、板葺あるいは桧皮葺であったと想定される。また今回検出した井戸や 4 棟の建物を含む地区は寺域の最北辺に位置して雑舎的な性格をもつものと考えられる。

寺域を画する堀については、紀寺や飛鳥寺（概報 8）にあっても、掘立柱であり、藤原宮城を限る施設も同様に掘立柱堀であることから、SA 600 が大官大寺の寺域を限るものであったとしてよからう。『額安寺班田図』は奈良時代の伽藍様相を伝える貴重な資料であるが、そこに描かれた寺域北辺部をみると伽藍中軸線上に北門ではなく、東へずれている。また北門付近には倉庫が立ち並び、伽藍中心部にある瓦葺建物とは異なった建物が数棟描かれている。こうした寺域北辺部の様相は、今回の発掘地の性格を考える上で参考になろう。

以上のように、今回検出した SA 600 を寺域北限の施設とみなすと、推定九条条間路心との間には約 29m の距離があり、これから道路幅を差引いたとしてもかなり幅の広い瑞地があったことになる。また、大官大寺の西を限るとみられる小山池検出の SA 2700（概報 10）と推定東三坊大路心との距離 24.5m の関係も同様に幅の広い瑞地が想定される。最後に大官大寺の寺域の規模にふれておくと、西を限る堀 SA 2700 と金堂心との心々距離が 110.5m であることから東西は 2 町となる。そして南限に関しては中門が推定十条条間路の南にあり、南門は未調査であるが、十条大路に面していたとみられることから、南北を 3 町と想定できる。すなわち大官大寺は東三坊大路、東四坊大路、十条大路、九条条間路にそれぞれ面し、東西 2 町、南北 3 町の寺域をもつ寺院であったと推定される。詳細は今後の調査でさらに検討を加えていくことになろう。

桧隈寺第2次の調査

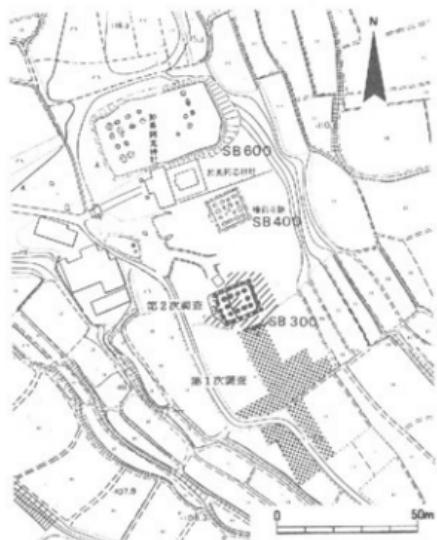
(昭和55年8月～昭和55年11月)

東漢氏の中心氏族桧隈氏の氏寺として建立された桧隈寺について、昭和54年から発掘調査を行っている。第1次調査は、南門の検出を目的としたが、顕著な遺構は検出されなかった。そこで、今回の第2次調査では、中門推定地の土壇状の高まりに焦点を合わせて発掘調査を行った。

その結果、金堂と推定される礎石建物SB300と、中世以降の土壙、ピットおよび溝を検出した。なお、発掘区南端の一部は第1次調査地と重複する。

SB300の遺構 発掘前のSB300の基壇は、東西18m、南北15m、高さ1.7m程の方形の土壇で、その上面に礎石が4個露出していた。

調査の結果、SB300は桁行3間、梁行2間の身舎を持つ正面5間、奥行4間の礎石建物であることが確認された。礎石は全部で11個あり、すべて原位置

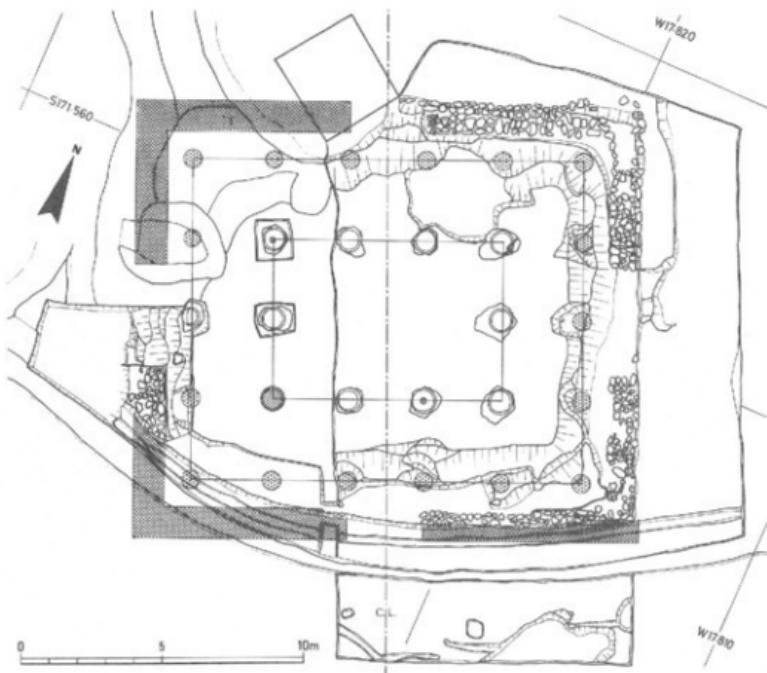


調査位置図 (1 : 2000)

を保っている。身舎の礎石は全て存在するが、側柱の礎石は棟通り西端の1個のみが残存していた。その他の礎石はすべて抜取られている。抜取痕跡は西側柱列の南から2番目で確認したが、他の箇所では木の根が土壙深く張っていたため明確には検出できなかった。礎石はすべて花崗岩製で、円形の柱座が造り出されている。柱座は身舎で径0.75～0.80m、側柱で径0.7m程である。身舎の礎石には、柱のあたりが残存するものがあり、

それによれば柱直径 0.605 m となる。なお、身舎の 2 個の礎石上面には、径約 0.2 m の小穴を穿ったものがある。後世の加工とも考えられるが性格は不明である。また、残存した側柱の礎石の柱座は円形ではなく、弧の $\frac{1}{4}$ が直線となる半月状を呈する。柱間寸法は身舎の桁行が 2.72 m、梁行が 2.81 m、側柱の桁行は 2.88 m である。造営尺は完数を得ようとすれば、一尺 = 0.303 m となる。この数値をあててみると、身舎の桁行 9 尺等間、梁行 9.3 尺等間、廟の出は 9.5 尺等間に復原でき、桁行総長 13.92 m、梁行総長 11.38 m となる。

基壇は四面に階段のとりつく二重基壇であったと推定できる。下成基壇は、花崗岩を主体とした人頭大の扁平な河原石を約 1.1 m の幅に敷き並べたもので、基壇の外周には縁石をめぐらしている。基壇上面は内側がやや高いゆるやかな傾斜面をなす。上成基壇については凝灰岩の痕跡が認められず、また、瓦積み



造構配図 (1 : 200)

基壇とみるべき痕跡も認められることから、どのような構造であったか詳細は不明であるが、あるいは玉石を積んだものであったのかも知れない。基壇規模は、下成基壇が外縁で東西 17.95 m、南北 15.5 m（約 59 尺、約 51 尺）になる。上成基壇は、その基壇端を仮に下成基壇敷石部外縁から内に 0.8 m の位置とすれば、東西 16.35 m、南北 13.9 m（約 54 尺、約 46 尺）となる。基壇総高は 1.3 m で、うち上成部は 1.15 m、下成部は 0.15 m となる。

基壇築成にあたっては、下成基壇の範囲の地山を削り出し、その上面を整えた後、版築層を重ねている。黄褐色粘質土と赤褐色ないし黒褐色粘質土を交互につき固めたもので、厚さ 2 ~ 4 cm の版築層を高さ 0.8 m にわたって重ねている。礎石は基壇築成中に根固め石を用いずに据え付け、さらに版築を重ねて固定している。なお版築土中にはわずかではあるが 7 世紀前半の須恵器、土師器の小片が含まれていた。下成基壇は先に築成した基壇の四周を削り込み整形する。石敷は厚さ 0.1 ~ 0.2 m の裏込め土を置いたのちに敷設している。階段は下成基壇を整形する際に基壇各辺の中央を削り残して作っているが、現状では著しく削平されており、わずかに痕跡をとどめるにすぎない。この部分には下成基壇面の敷石がなく、その幅は南辺と北辺では 2.73 m、東辺と西辺では 3.75



SB 300 全景（南から、後方の十三重石塔は塔跡に建つ）

mである。但し、東・西両辺の階段については、南・北両辺に比べて幅が広く、取り付きの側柱礎石に加工痕があることから、あるいは回廊が取り付いていたとも考えられる。

SB 300周辺の遺構 調査 地の基本的な層序は表土、暗褐 色土、黄褐色土、地山となり、



下成基壇（北西から）

地山直上まで12世紀以降の遺物が含まれていたが、焼土層や炭化物層は存在しなかった。検出した主な遺構は、いずれも12世紀以降のもので基壇東辺の溝、南辺の水田地区の土壤、ピット、溝等がある。従って SB 300 の基壇周辺は、12世紀以降大幅な削平を受けていたと考えられる。

出土遺物 瓦、土器、金属製品、玉類がある。

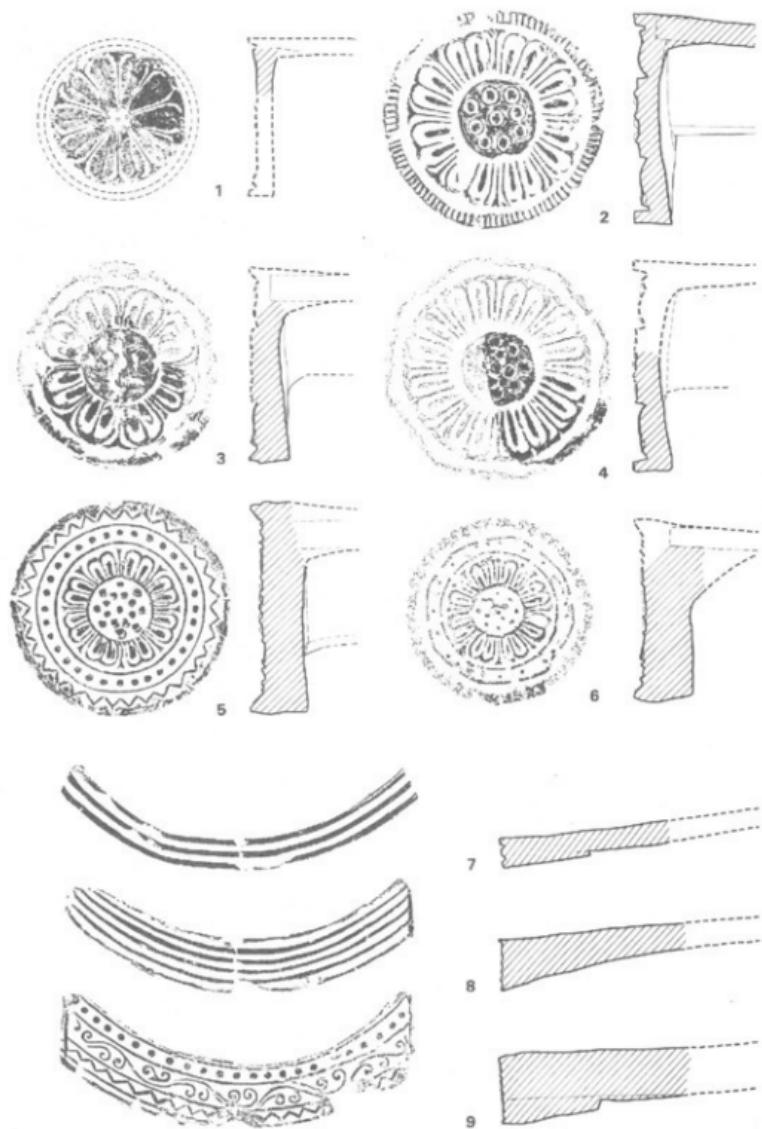
瓦は基壇上面および基壇周辺から出土した。特に北辺で多量に出土した大形破片は SB 300 の使用瓦と推定される。その他の三辺では小破片が多く、12世紀以降、破碎・整理されている形跡がうかがえた。

出土した瓦には、軒丸瓦、軒平瓦、樋先瓦、尾樋先瓦、鬼瓦および多量の丸・平瓦がある。

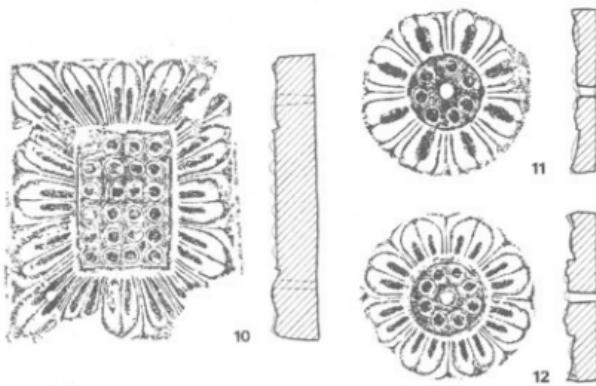
軒丸瓦は4型式9種ある。I型式はA・Bの2種がある。A(1)は素弁十弁蓮華文で、弁端はやや反転して盛り上がる。B(概報10、p52の1)は素弁八弁蓮華文で、花弁中に連接する複子葉と左右4条ずつ楔形の火焔を線で表現する。中房に1+4の小蓮子を配するものである。II型式は複弁八弁蓮華文で4種ある。A(2)・B・D(4)は直立線に幅線文を配した、いわゆる「桧隈寺式」と称されるものである。Bの類

	型式	点数
軒	I A	1
	B	5
丸	II A	80
	B	1
瓦	C	4
	D	1
軒	III A	15
	B	4
瓦	IV	4
	計	115
軒	II A	56
	B	39
	C	29
	D	15
平	III A	36
	IV	3
	V	2
瓦	計	180

出土軒瓦分類表



轩瓦实测图 (1 : 5)



尾拂先・拂先瓦実測図 (1 : 5)

例（奈良国立博物館『飛鳥白鳳の古瓦』の291）によれば、BはA・Dに比べて中房の高さや蓮子の配置が違い、Bの子葉がやや細身であるが、全体としては良く似ている。A・B共に1+8の円圈付大形蓮子を配する。D(4)は中房の蓮子が1+4+8である。C(3)は外縁に粗い線鋸歯を施すもので、子葉の盛り上がりが低く、大形の中房に1+8の蓮子を配する。Ⅲ型式は藤原宮式に類似する複弁八弁蓮華文で、A(5)・B(概報10、p52の3)の2種がある。Aは6275G型式で中房の蓮子が1+8+8、Bは1+4+12である。いずれも外縁は粗い線鋸歯の傾斜線である。Ⅳ型式(6)は6275系の複弁八弁蓮華文で、Ⅲ型式に比べて小形化している。中房の蓮子は1+4+8である。

軒平瓦は4型式8種ある。Ⅱ型式は重弧文で、A(概報10、p52の7)、B、C(7)、D(8)の4種ある。ABC共に三重弧文である。いずれも段顎で、Aの顎幅が最も広い。Dは範作りによる五重弧文で、曲線顎である。Ⅲ型式は6641系で、A(9)・B(概報10、p52の9)の2種あるが、今回はAのみ出土した。ほとんどが両脇区を切り落している。段顎である。またそのうち文様の途中で切ったり下脇区を切り落したりして、瓦当面を切り縮めるものがある。Ⅳ型式は東大寺式の均整唐草文で、6732A型式である。Ⅴ型式は、平安時代末期以降の段顎の発達した軒平瓦である。

樋先瓦は円形で、A（11）・B（12）の2種ある。Aは単弁、Bは複弁の八弁蓮華文で、円圏を持つ大形蓮子をそれぞれ7個と8個配する。A60点、B38点出土した。尾樋先瓦（10）は複弁十六弁蓮華文で方形を呈する。縦25.3cm、横20.1cmで方形の中房に円圏を持つ大形の蓮子を、縦6個、横4個計24個を方格状に配置する。四方の隅に各1個ずつ釘穴がある。21点出土した。鬼瓦には鬼面瓦片が1片ある。そのほか、丸瓦凸面に「^{瓦か}」とヘラ書きした文字瓦が1点ある。

多量に出土した丸・平瓦は凸面繩叩きのものが主体をなすが、凸面格子叩きも存在する。また、川原寺出土例で知られる凸面布目の平瓦が存在する。

軒瓦の出土比率を見れば、軒丸瓦IIのABDと軒平瓦IIのABCで、それぞれの7割を占めている。これらと組み合うと考えられる樋先瓦・尾樋先瓦を含めれば、出土軒瓦の8割を占めることになる。

上器は基壇版築十出土の7世紀前半の上師器・須恵器と基壇周辺から出土した7～8世紀の上師器・須恵器が少量ある。また、基壇上面および周辺から12世紀以降の土師器・瓦器・青磁等が出土している。

金属製品には、鉄釘、金銅製の飾り金具・金折り金具・止め金具、鈎銅製品、玉類には小形の丸玉と乳頭形をしたものがある。

まとめ　今回の発掘対象地の土壇は、從来中門と考えられてきた。しかし、予想に反して、桁行3間、梁行2間の身舎に四面廂のつく礎石建物SB300が確認された。

SB300は身舎の柱間が桁行9尺等間、梁行9.3尺等間、廂の出が9.5尺、側柱心から上成基壇の推定縁までの距離は4尺に復原できる。廂の出が身舎の柱間より広く、基壇の出が著しく狭い平面構造は同時代の遺構に類例がなく、建物はかなり特異な構造のものであったと推定される。建物の平面規模の状況に加えて、礎石が、寺域内に残存する他の堂塔の礎石に比べて大きく、加工もすぐれていること、あるいは基壇面が最も高いレベルに位置することなどから、SB300は桧隈寺の金堂であったと推定するのが最も妥当であり、かつて考えられていたような中門でないことが明らかになったのである。

SB 300 の建立時期は、出土瓦から言えば、輻線文を持つ複弁八弁蓮華文軒丸瓦・三重弧文軒平瓦および極先瓦・尾極先瓦が出土瓦の 8 割以上を占めるところから、7 世紀後半に比定できる。基壇築成土中から 7 世紀前半の土器が出土することも、その傍証になる。『日本書紀』朱鳥元年（686 年）の桧隈寺の記事は、SB 300 の年代の一端を示すものであろう。SB 300 は出土瓦の状況からみて 8 世紀後半のある時期までは改修、維持されたが、それ以後瓦に見るべきものがないので、9 世紀に入れば衰退していったと推定される。廃絶の時期は、基壇周辺が削平を受けた 12 世紀頃と推定される。塔 SB 400 も十三重石塔の年代から、少なくとも平安時代末には廃絶したと考えられている。

SB 300 の建物方位は、真北に対して約 $23^{\circ}19'$ 西に偏する。これをそのまま北西に延長すれば、SB 600 の中軸線にはほぼ一致する。また塔の建物方位は、真北に対して約 $24^{\circ}39'$ 西に偏している。伽藍中軸線は、まだ確定していないが、真北に対して $23^{\circ}\sim24^{\circ}$ 前後西に偏するか、あるいはこれに直交するものと思われる。これは、桧隈寺が北西に延びる丘陵に立地していることから、おそらく地形に制約されたものであろう。

伽藍配置については、従来法起寺式あるいは薬師寺式の配置をとり、南面すると考えられていたが、SB 300 が金堂に想定されることになったため、再検討の必要が生じた。しかし、過去の調査結果や塔および SB 600 の位置を考慮しても、桧隈寺の伽藍配置については不明な点が多く残されている。今後の調査を待ちたい。

坂田寺第3次の調査

(昭和56年4月)

この調査は、明日香村営上水道加圧ポンプ場の建設に伴う事前調査として実施したものである。調査は当初約20m²を対象としたが、重要な遺構の検出に伴い再三にわたって発掘区を拡張して、最終的には約100m²について調査を行った。調査の結果、須弥壇を伴う基壇建物の一部を検出し、この地域が坂田寺伽藍の中枢部分にあたることが判明した。なお、これに対する村当局の迅速な措置により、ポンプ場の建設位置は変更されることになった。

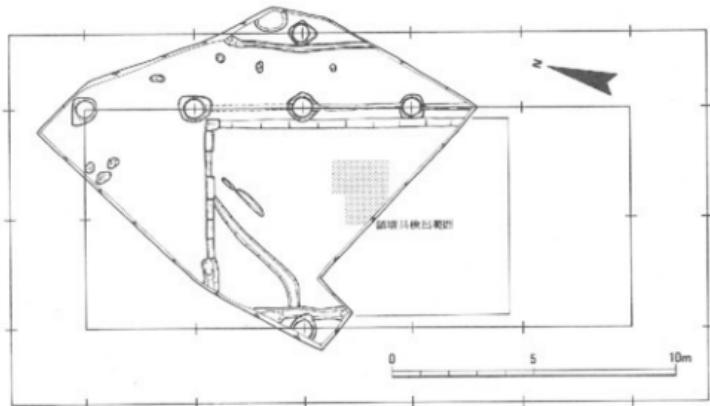
調査地は『坂田金剛寺址』の石碑に南接する水田で、古宮（フルミヤ）の小字名を有する。地形は南東から北西に下るかなり急勾配の傾斜地である。

遺構は現水田面から0.9～1.2mの深さで検出した。遺構面に至る層序は、上から、床土、粗砂と粘土の互層による厚さ50cm前後の堆積層、20～30cmの厚さの粘質砂質土層と続く。この下には厚さ10cm前後の焼土層があり、遺構面直上に堆積している。焼土には漆膜片、白土、炭化材片、土器が含まれていた。

SB 150の遺構 SB 150は主軸方向が東で北にはば15度偏する南北棟で、



調査位置図 (1 : 2000)



遺構配置図 (1 : 200)

桁行5間、梁行2間の身舎の四面に廂が付く基壇建物であると考えられる。この調査では東入側柱3間分と東側柱礎石、西入側柱礎石各1を検出した。基壇端は調査区の外に想定される。柱間寸法は身舎が3.86m(13尺)等間、廂の出が2.68m(9尺)である。従って建物としては桁行総長24.7m(83尺)、梁行総長13.1m(44尺)の規模に復原できる。礎石は花崗岩を加工したもので、いずれも円形柱座を造り出している。柱座径は入側柱礎石で66~71cm、側柱礎石で58cmである。

身舎の中央3間分は柱筋より内方に30~40cm寄せて、周囲の基壇面より約20cm高い平面長方形の壇状につくられている。これは仏像や厨子などを置く須弥壇と考えられる。壇の北側縁は凝灰岩の切石により仕切られ、西側縁には切石の抜取痕跡が確認された。一方、東側縁には壇化粧の痕跡がなく、約45度の勾配をもつ傾斜面をなしており、それに接する3間の柱間には復原方約13cmの断面をもつ角材が置かれていた。この角材は壁受の横木と考えられ、この3間は壁面であったと想定される。従ってこの部分が須弥壇の背面にあたり、建物は西方を正面とするものであったことがしられる。基壇および須弥壇上面は粘質土で堅く固められており、直上には倒壊した壁の白土や銅釘なども焼土に混って堆積している。このことから基壇面は本米舗装のない土間床であったと思わ

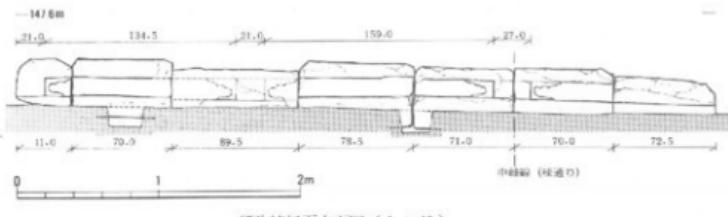
れる。なお、基壇面は西方（正面側）がわずかに低い傾斜面につくられている。

凝灰岩切石は須弥壇の北側縁に 7 石遺存していた。東端の隅石は 51.0×41.0 cm の平面矩形を呈し、他の 6 石のうち 4 石は長さ $70.0 \sim 72.5$ cm で、残りの 2 石は 89.5 cm, 78.5 cm と不揃いであるが、東から 5 石目と 6 石目の境は建物のはば棟通り（南北中軸線上）にあることから、両端に隅石を置き、間に 8 石の切石を配していたと想定される。これらの切石は表面を加工して地覆、羽目、束、葛を削り出しており、さらに束の両側には花頭曲線の格狭間を浮彫りにしている。束の幅は東隅が 21.0 cm、北側縁中央が 27.0 cm、両方の中間が 21.0 cm であり、羽目 1 区の長さは東から 134.5 cm, 159.0 cm である。東から 2 番目の束と中央の束との心々距離はほぼ 180 cm (6 尺)、また隅石の羽目から中央の束心までは 329 cm (11 尺) であることから、中央 2 区を 6 尺、両端の 2 区を 5 尺で割り付け、さらに中央の束幅を 9 寸、両側 4 カ所の束を各 7 寸幅に設定したものと考えられる。

基壇および須弥壇の築成工程を明らかにするために一部断面調査を行った。地山面（細砂層）は基壇の東部分では須弥壇の位置に比べて廂部分が深く、地山面上には約 70 cm の厚さに人頭大の石塊や瓦片を含む土層が不整合の状態で堆積している。この堆積土面を切って須弥壇範囲に、深さ約 40 cm の掘込み地業を



SB 150 (南から)



須弥塚縁石立面図（1：40）

行った後、据付け穴を掘り、礎石を据えている。その後、基壇面全面にわたって厚さ10cm前後の黄褐色粘質土を敷きつめる。後述するように、須弥塚鎮道具はこの工程に併行して埋納されている。その後、須弥塚を厚さ5cm前後の版築層を4～5層重ねて築成する。なお、掘込み地業土や版築土中には礫や瓦が若干混在していた。須弥塚背面は基壇築成層を削って斜面につくり、他の三面は据え形をやや深めに掘り込んで凝灰岩切石を据え付けている。以上のように基壇築成に際しては、この部分に限ってみれば礎石据え付け以前の基礎地業が行われていないようである。しかし、須弥塚北側部分の断面調査では、須弥塚下に連続する厚さ5～10cmの土層が基壇面下約1mにおよぶ範囲に整合状態で堆積しており、東側とは異なった状況を呈しているが、今回の調査では全体の様子を十分解明するに至らなかった。

鎮道具　　調査の最終段階に至り、須弥塚の鎮道具を探査すべく発掘区を設けた。その結果、須弥塚のはば中央の、約1.3m東（背面）寄りの位置に径約80cmの範囲にわたって10種40点におよぶ埋納品を検出した。これらの埋納品は厳密には中軸線から20cm程右寄り（南寄り）に分布しており、最奥部に鏡を背面を上にして置き、その周間に金箔、水晶玉、琥珀玉、銅錢、刀子、金銅製挾子を配する。鏡から正面寄り約40cmには灰釉小型双耳瓶があり、また鏡の直下には瑠璃玉2個が置かれていた。銅錢には重なった状態のもの（2カ所—10点と9点）と1枚ずつのもの（9点）とがあり、そのうちの1点は他の埋納品から離れて、鏡から南西方1.5mの位置に検出した。また絹布片を2カ所で確認した。これらは先述のように、須弥塚築成直前の、基壇全面を覆う粘質土を敷きつめる工程に伴って安置されており、須弥塚上面から18～26cmの深さに集中

している。以上のように、埋納に伴う掘形は認められなかったものの、位置および埋納の状況からみて、この一群の埋納品は須弥壇の築成にかかわる鎮壇具であると考えられる。なお、須弥壇北東隅においても1m四方の範囲を掘り下げて鎮壇具の有無を調査したが、1点の埋納品も存在していないことが判明した。

出土遺物 SB 150 の

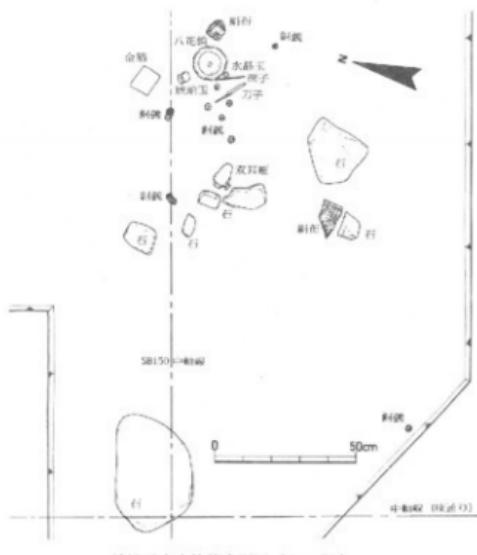
須弥壇下から出土した鎮壇具には瑞雲双鸞八花鏡1面、心葉形水晶玉1点、琥珀大玉2点、瑠璃玉2点、金箔1点、金銅製挾子1点、鉄製刀子1点、銅錢28点、灰釉小型双耳瓶1点のほか、紺布の断片がある。

瑞雲双鸞八花鏡(1)は青銅製の唐式鏡である。鏡背の文様は界囲で内区と外区を分け、内区には円鉢を挟んで鳳凰が相対し、上に瑞雲を、下に蔓草の上で実をくわえる鳥をあしらう。外区には各弧ごとに飛雲と草花を交互に配する。鏡面はわずかに反りをもつ。文様は不鮮明で線が太く鈍い。表面径11.4cm、背面径11.0cm、縁厚0.45cm、界囲径7.4cm、重量155gである。

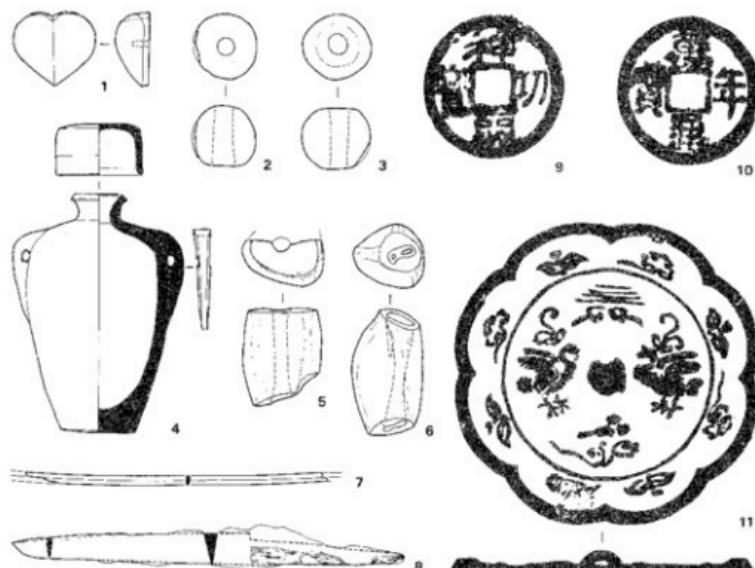
心葉形水晶玉(1)はハート形の平面をもつもので、長さ1.3cm、厚さ0.6cmである。表面は平滑な曲面を呈し中央に鋭い稜をもつが、裏面は平坦面で中央に深さ3mmの貫通しない小孔があく。周縁は垂直面をなす。

琥珀大玉(5・6)は長さ4.5cmと3.4cmの2点がある。4は埋納以前に縦に半割している。断面は不整円形を呈し、中軸に貫通孔があく。

瑠璃玉(2・3)は径・厚さとも1.1~1.2cmの丸玉で、上下両端をやや平



鎮壇具出土状態実測図 (1 : 20)



銅壇具尖端圖（1～3、9、10は1：1、他は1：2）

壇面につくる。中軸に径3mmの貫通孔があく。現状では白濁しており、表面の風化、剥落が進行している。

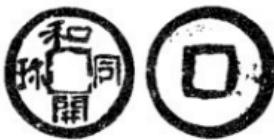
金箱は約7×9cmの長方形のごく薄いものである。鎖壇具の中では最も北よりの位置に置かれていた。

金銅製挾子（7）は両端を折損した残欠であり、表面には鍍金がわずかに残る。現存長10.8cm、直径1.7mmある。

鉄製刀子（8）は平造りの刀身をもち、茎部に把の木質が残るが、刃部はない。全長14.0cm、最大幅1.1cm、刃部長8.5cmある。

銅錢（9・10）は28点を数える。和同開珎（2点）、萬年通寶（3点）、神功開寶（11点）の3種があり、銹化や銹苔のため銭文の不明なものが12点ある。先述のように2カ所では積み重ねた状態で埋納されており、そのうちの一群は萬年通寶3点、神功開寶7点計10点からなる。他の一群は9点が重なるものの、銹着しているために和同開珎2点が確認されたにとどまる。

灰釉小型双耳瓶（4）は肩部に1対の把手がつく小型の製品で、被せ蓋を伴う。瓶の肩部以上および蓋の上面には濃緑色の釉がかかる。瓶の器高8.4cm、口径1.6cm、胴径5.0cm、底径2.6cm、蓋は器高1.8cm、口径3.0cmある。



和同開銀錢（1：1）

絹布は築成土中に圧着した状態で検出した。腐蝕が著しく、2カ所で存在を確認したにとどまる。そのうちの1点は 15×10 cm以上の広さをもつ平織りであることがわかるが、本来の形状等は不明である。絹布は腐蝕しやすい物だけに、鎮壇具の1つとして埋納されたものであるのかどうかについては出土状態のみでは決めがたい。

基壇および須弥壇上面の焼上層から銅釘、土師器、漆膜片、和同開銀錢が出土し、焼土面上の堆積層から軒丸瓦5点、軒平瓦1点の他、埴仏の小破片が1点出土した。また基壇土中から軒丸瓦1点が出土している。銅釘は17点あり、大部分は円頭の小型角釘であるが、1点だけ鍍金を施した環状の釘頭をもつものがある。長さ2.5～5.5cm。上飾器には皿の破片が数点ある。型式的にみていずれも10世紀後半のものである。漆膜片は須弥壇上中央から背後にかけて大量に出土した。いずれも脱活乾漆像と思われる断片であり、そのうちには麻布、抹香漆、下地漆、黒漆、金箔の層が確認される。また像の大きさ、尊名等は細かい断片に分れているので確定しがたいが、等身大以上の大きさで菩薩像の可能性があるという。^{*}

和同開銀錢は須弥壇背後の斜面上で検出した。直径2.31cm、重量5.75gある。基壇土中から出土した軒瓦は単弁八弁の蓮華文軒丸瓦で、7世紀後半に位置付けられる。

まとめ 今回の調査は狭い範囲のものではあったが、坂田寺に関するいくつかの重要な知見を得ることができた。伽藍中枢の建物と考えられるSB150の造営は、須弥壇の築成に直接伴う鎮壇具に含まれる28点の銅錢のうち大半が神功開寶であることから天平神護元年（765）を通りえず、またこれより新しい銭貨がないことから、次の隆平永寶の初鑄年（延暦15年・796）を下らない

と思われる。

須弥壇の格狭間の花頭曲線による浮彫りの意匠は、古くは法隆寺玉虫厨子の宮殿部基壇の格狭間にみられるものの、正倉院蔵の箱物や厨子、几台類などの床脚（台脚）の剝形や、法隆寺に伝わる奈良時代の作とされる仏像の台座の格狭間にも頻繁に用いられていることからも、奈良時代後半期には比較的通有のものであったと思われる。SB 150 は基壇面直上に焼土層が堆積しており、焼失したものと判断される。焼失の年代は焼土に含まれていた土師器の年代観により、10世紀後半と考えられる。従って、SB 150 は8世紀後半に建立され、10世紀後半に至る2世紀のあいだ営まれていたことになる。

さて、SB 150 は坂田寺伽藍のどの建物に比定できるのであろうか。身舎中央に須弥壇が設けられていることから金堂あるいは講堂のいずれかと考えられよう。西面している SB 150 の建物背後には東西30~40mの平坦地があり、そこに伽藍建物を想定することは可能である。一方、西方には東西100m以上の範囲にわたり、SB 150 の建物中軸線の方位の振れとほぼ同方向の水田地割が現存している。とすれば SB 150 が金堂である可能性が強いが、今回の調査の限りにおいては、SB 150 の平面規模を桁行9間に想定することも可能であり、また基壇面が土間床である点からも、金堂と断定するには不確定な要素が残る。

坂田寺については、当調査部により過去2回にわたる発掘調査が行われている。いずれも今回の調査地から北西40~80mにあり、かつて石田茂作氏が門址ではないかと推定した地点（『飛鳥時代寺院址の研究』昭和11年）を中心に寺域確認のために行ったものである。前2回の調査で約1000㎡を発掘し、井戸、石組溝、柱列、石垣、池など7世紀から11世紀以降に至る多様な遺構を確認した。これらの遺構の性格については必ずしも明らかにされていないが、想定されていたような門跡は存在せず、方2.5mの大型井戸が示すように厨的性格がうかがえる。SB 150 が西面していることと、周辺の地形、現存の水田地割等から、伽藍は西方を正面としていたと考えられる。そうであれば、SB 150 が金堂あるいは講堂に比定されることから、第2次調査区の位置には回廊の存在が想定される。8世紀の造成になる東西方向の石垣 SX 120（位置図参照）は

南が約2.5m高い壇を形成する。壇上は若干削平されていると思われるものの、SB 150 の基壇上面との高低差は2m余りにすぎず、SX 120 とその南の壇状部が同廊にかかるものである可能性がある。SB 150 の建物中軸線から石垣 SX 120 までの距離はほぼ27.0m(90尺)であり、また更に北に検出されている東西方向の掘立柱列 SA 060 との距離は約54.0m(180尺)あり、SX 120 は SA 060 と SB 150 の中軸線との丁度中間に位置することになる。また石垣 SX 120 にとりつく斜道 SX 122 の位置は SB 150 の南北方向の中軸線(棟通り)から、やはりほぼ27.0m(90尺)に設けられており、これらの諸施設が一定の規格性をもって配置されていたものと考えられる。今回検出した SB 150 は前述したように8世紀後半に造営されたものであり、伽藍中心建物の一つと考えられる。これにより、坂田寺伽藍配置の解明に重要な糸口がつかめることになる。しかし、文献や出土瓦類からうかがえる7世紀前半の寺創建時の建物は SB 150 付近には確認できなかった。

今回の調査で須弥壇鎮壇具を検出したことは重要な成果の一つに挙げられる。奈良時代の鎮壇具には從来、興福寺中金堂、元興寺塔、法華寺金堂、東大寺大仏殿などの例が知られる。しかしそれらはいずれも埋納状態が正確に確認されたものではなく、今回の検出例は発掘調査によるものとしては唯一の事例であり、それだけに今後の鎮壇具研究に貴重な資料となろう。なお、今回検出した鎮壇具に関する詳細な検討は、伽藍配置やその変遷の考察と共に刊行を予定している報告書に委ねたい。

* 奈良国立博物館 仏教美術資料研究センター 仏教美術研究室長
田中義恭氏の鑑定による。

豊浦寺の調査

(昭和55年3月～昭和55年4月)

この調査は、向原寺薬師堂（天保5年建立）の解体移築工事にともなう発掘調査で、現薬師堂敷地を中心に66m²の面積を発掘した。

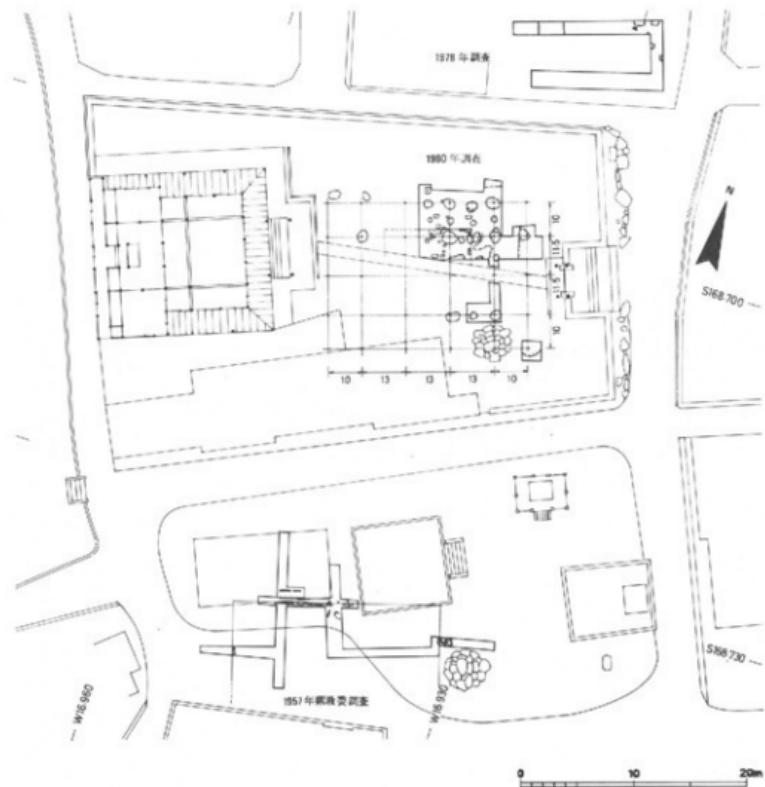
この地は古来より、旧向原寺あるいは豊浦寺の寺跡に比定され、それに関して論述したものも多いが、原資料がとぼしいことやあっていままで往時の伽藍の全容を想定するまでにはいたっていない。しかし、1957年の奈良県教育委員会による部分的発掘、1960年以降の当研究所の行った数カ所の小規模な発掘等で、この付近一帯が飛鳥時代草創の寺跡とみられ、かつ、中世まで盛衰をくり返しながらも大規模伽藍として存続していたらしいこと、建物の軸線はいずれも北で西へ約18°～20°の振れがあること、などが判明している。

発掘前の状況は、現薬師堂敷地内に約0.3mの高さで亀腹風に土盛・築成し



調査地全景（南西から）

ていた。発掘に先立ち、これらを除去したところ数個の自然石礎石とともに、その抜取跡、仏壇を画するとみられる凝灰岩切石列、などが現われ、しかも、これらが地表面ともども木炭混りの灰層によって覆われていて、明らかに焼失したことを見ていた。この礎石は、現境内の既露出礎石と同時期・同建物のものとみてよく、両者を結ぶことによって、桁行5間、梁行4間の仏堂を復原することが可能である。建物はほぼ南面するものの、その軸線は約18°の振れがある。礎石中間にあるやや小形の石を床束石とすると床板張りの堂となるが、その場合、凝灰岩切石は床を切り込んで設けた造り付け仏壇の地覆石とみられ



造構配図 (1 : 500)

よう。なお、本堂前西方の2個の礎石はこの線にのらないので、あるいは移動しているのかも知れない。

発掘区中央で、南北の軸線にそって幅0.7mのトレンチを設け上層の観察を行った。その結果、基壇は0.45mの厚さに、黄褐色粘質土と暗褐色砂質土とで交互に版築されていて、さらにその下には、約1mの厚さにわたり、前版築よりは一段と荒く、かつ、上質も異なる下層の版築が重なって存在していることがわかった。しかも、両者の間には灰層が断続的に連なっていた。下層版築より下は、自然堆積層で、上方からは古墳時代中期の土師器・須恵器片が混るもの、下方に行くに従い無遺物層となる。一部分2.5mまで深掘りしたがそれでも地山には達しなかった。

以上のことから、自然堆積層上に築成された初期基壇は、ある時期火災を被る、その上に改めて第2次基壇が築成されたのが、現境内露出礎石とみあうものである、やがてそれも焼失する、そして、その後現薬師堂のための土盛を行った、という3期の過程をさぐることができる。

それぞれの時期については、現時点では明確になしえないが、建物その他から次の推定が成り立つ。すなわち第2次基壇にともなう建物の焼失は、上面灰層の中から室町時代後半の土師器の皿があることから、この頃とみてよく、その築成は、巴文・唐草文で構成される中世初期の軒瓦が焼けた状態で比較的まとまって出土すること、復原堂がいわゆる三間四面堂の古式をもつものの床板張りであること、仮壇地覆とみられる凝灰岩が転用材であることなどから、鎌倉時代の初め頃とすることができよう。

一方、初期基壇については断面観察にとどまったこともあって、時期とともにその規模なども判然としないが、表面採取した単弁蓮華文軒丸瓦の時期—7世紀中頃—とみられなくもない。

いずれにしても今回の発掘は、ごく小範囲のことであり、この地が中世再建堂の跡地であり、かつ、前身堂が存在したという事実をあげるにとどめ、さらに今後の調査に期待したい。

飛鳥寺周辺の調査

(A・B調査地 昭和55年12月)

飛鳥寺周辺では寺域推定地の東方と西方の2カ所で発掘調査を実施した。

A調査地　調査地は飛鳥坐神社の南西方約80mの水田で、飛鳥寺寺域推定地の東接地にあたる。水田は、南東から北西へのびる二つの丘陵で形成された谷筋の開口部に立地しており、そこに南北2m、東西8mの調査区を設定した。

調査区の層序は、耕土、床土、黄灰色粘質土、灰褐色粘質土、青灰色粘土、暗灰色粘土、暗灰色砂となる。遺構は灰褐色粘質土層の上面から掘込まれた素掘りの井戸のみであるが、青灰色粘土・暗灰色粘土層にも飛鳥寺の丸・平瓦片が含まれていた。井戸の一部は調査区外に拡がる。平面形は長径1.3m以上の



調査地位図 (1 : 4000)

梢円形で、深さは1.2mある。出土した須恵器や飛鳥寺軒丸瓦XIVA型式からみて、この井戸は奈良時代後半には埋められたと考えられる。

B調査地　調査地は、飛鳥寺の西面築地推定地から西へ約40mの位置にある。二枚の水田に東・西の二区を設けて調査を実施した。東区は南北1.3m、東西15m、西区は南北1.6m、東西28mである。なお、西区には顕著な遺構が認められなかったので、ここでは東区の遺構について述べる。

東区の層序は上から耕土、床土、黄色粘土、黒茶褐色粘質土、暗茶褐色粘質土となり、地表下0.5～1mにある暗茶褐色粘質土層の上面で礫敷を検出した。礫敷は東区全面にわたって、拳大の礫や丸・平瓦を敷きならしたものであるが、上面は平坦でなく、二段に作られ、東半部が西半部よりも20cm高くなる。さらに、東半部、すなわち上段部の西縁には40～50cm大の自然石の西面を揃えて並べた南北方向の石列がある。石列の石は、暗茶褐色粘質土層上面から掘り込まれた掘形の底に礫を敷いた後に据えられている。礫敷の下面となる暗茶褐色粘質土は、東区の東西端では40cmの比高差があり、西へ向って緩く傾斜している。この点から考えると、石列は、段を設けて礫敷面を水平にするための施設と考えられる。また、石列西面の一点を国土方眼座標で示すと、

$$X = -169,051.000 \text{ m}$$

$$Y = -016,386.200 \text{ m} \quad \text{となる。}$$

今回の調査地は狭小な範囲に限られたため、礫敷の年代や性格について論じるまでは至らない。しかし、飛鳥寺西方地域では、これまでに玉石組みの溝や石敷が明らかにされており（奈良県立橿原考古学研究所編『飛鳥京跡』二 第11・18次調査），それらの遺構との関連が考えられよう。



B調査地 石列（北西から）

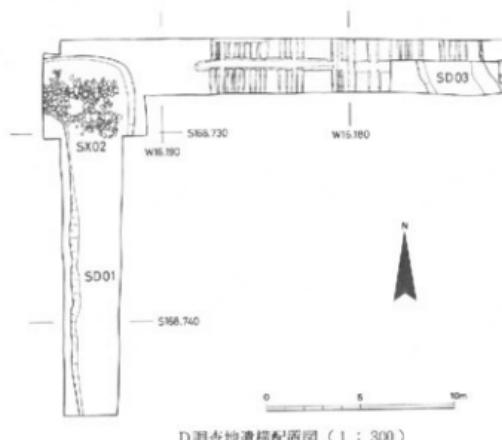
淨御原宮推定地周辺の調査

(C調査地 昭和55年8月)
(D調査地 昭和55年12月)

淨御原宮推定地では、東辺の2ヵ所で調査を実施した(64頁位置図参照)。このうち、C調査地では、西方を流れる通称「木部川」の氾濫による砂層を確認したにとどまり、ここではD調査地の調査について述べる。

D調査地 この調査は水田畦畔の崩壊防止工事に先立って行ったもので、調査地は飛鳥寺の北方350mにある。調査地の東100mには、多武峯山塊からのびた丘陵がせまり、その先端は「飛鳥塚」と呼ばれ、戦国時代の土豪飛鳥氏の山城跡と推定されている。調査は水田の西・北辺にそって、幅3mの調査区を東西24m、南北20mのL字形に設定して実施し、飛鳥時代や「飛鳥塚」に関する遺構の確認を目的とした。

調査地の主な層序は、耕土(20cm)、床土(40cm)、灰褐色粘土(20cm)、暗灰褐色粘土(30cm)、暗茶褐色粘土(20cm)、茶褐色粘土(20cm)及び茶褐色砂礫となり、暗灰褐色粘土上面でL字形に曲がる中世の大溝SD 01を、地山である茶褐色砂礫上面で7世紀初頭の斜行大溝SD 03を検出した。



SD 01は幅3.6m、深さ1.4mの素掘りの溝で、南北トレンチ北端で直角に西方へ曲がる。溝の堆積土は4層に大別され、底から青灰色砂(10cm)、青灰色粘土(70cm)、細砂と粘土の互層からなる灰褐色砂(40cm)、炭化物を含む暗灰色砂質

土（20cm）である。大溝隅にある集石遺構 SX 02 は、灰褐色砂の堆積後に構築されており、約40cm 大の花崗岩の北面をそろえて2段に積んだ石列と、石列の北西を中心に拡がる玉石群とからなる。玉石群は石列構築後なお数

層の堆積を経たのちに形

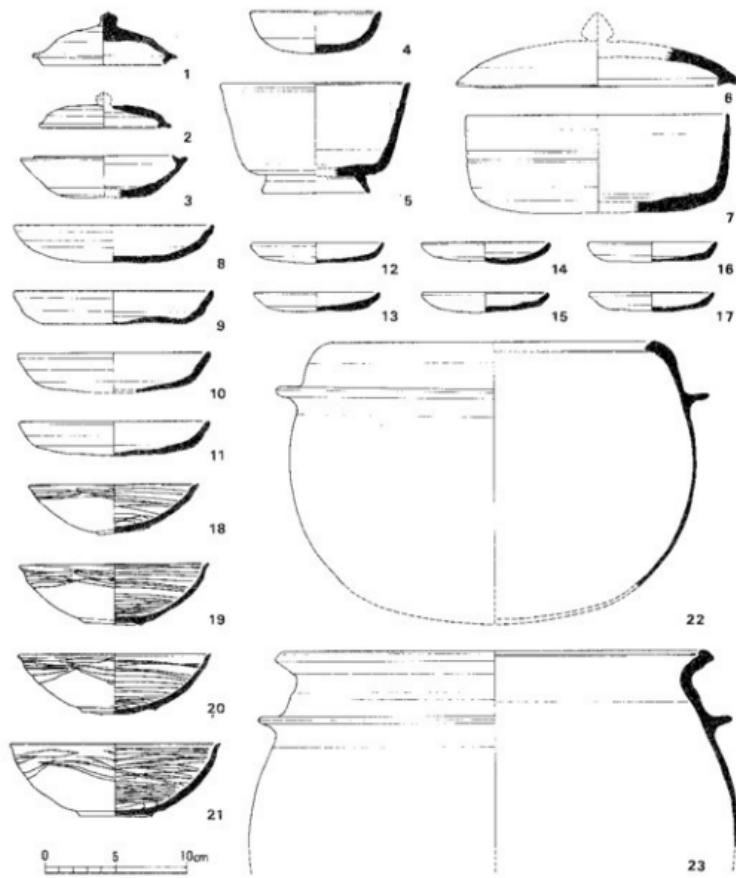


D調査地 SX 02 (南から)

成されており、集石遺構の性格・機能については不明な点が多い。遺物は主に上層2層から出土し、瓦器楕18～21、土師器皿8～17、羽釜22・23がある。瓦器楕では、口径13cm強の19・20が大半を占め、わずかに口径14.7cmの21や12cmと小さい18が含まれている。従って、出土土器の年代観によると、この溝は、12世紀中頃に始まり13世紀中頃に埋没したものとみられる。

斜行大溝 SD 03は、SD 01検出面の下約70cmの地山面で検出した。幅3.5m、深さ1.1mの素掘りの溝で、堆積土は底から青灰色砂、青灰色粘土、暗茶褐色粘土の3層に大別される。このうち、溝の最上層にある暗茶褐色粘土は溝を埋めたてた層であり、この層からは土師器4、須恵器1～3、5～7が出土した。これらは、飛鳥地域土器編年では7世紀第I四半期に比定される。

上述のように、本調査では、中世の大溝と7世紀初めの斜行大溝を検出した。今回検出したSD 01は、12世紀中頃～13世紀中頃に當まれた直角に折れ曲る溝である。これは、先年第27—6次調査（概報10）で検出したSD 2666・2665などと類似している。SD 01には、その北西隅に一時溝をせきとめる機能を果したとみられる集石遺構SX 02が築かれている点で、先の類例とは異なっているものの、中世集落を区画する溝の一部と考えられる。その場合、調査地は路東4里29条14坪にあり、その南北の坪界にそってL字形に流れる木部川との間の約1/4坪を集落とみることができよう。なお、「飛鳥塚」は同23坪全域を占めて



出土土器実測図 (SD 03 : 1~7, SD 01 : 8~23)

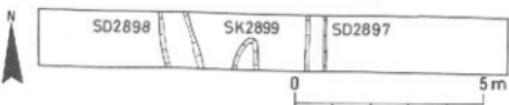
いるが、通説とこの溝とは一世紀以上の年代差があり、土豪飛鳥氏との関わりをにわかに論することはできない。

斜行大溝SD 03は、長さ2mを検出しただけであり、周辺の遺構やその性格等について不明な点が多い。ただ飛鳥寺北限の北1町余にあり、その創建とはほぼ同時期の溝として注目すべき遺構である。いずれにせよ、この地域は今後、広範囲な調査を要する地域である。

田中宮推定地周辺の調査

(A調査地 昭和55年6月)
(B調査地 昭和55年6月～7月)

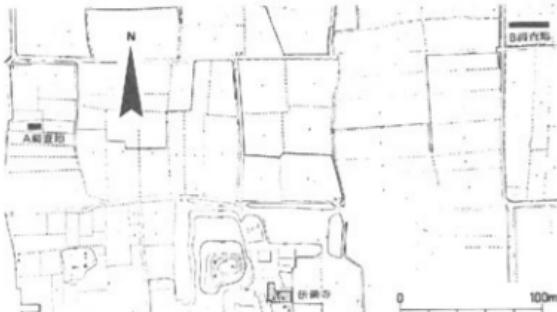
田中宮及び田中廃寺
推定地の周辺で、2ヵ所の小規模な発掘調査を行った。



B調査地 造構配置図 (1 : 150)

A調査地 調査地は、法満寺の北西約200mの畠地である。調査の結果、遺構は存在せず、厚さ約0.8mの耕土・床土下は2.5m以上にわたって砂礫層が続いている。ただし、床土からは7世紀代の土器が出土しており、この付近に田中宮或いは田中廃寺に関連した遺構の存在する可能性が大きい。

B調査地（第29-4次） 調査地は、法満寺の北東250mの水田で、藤原京の朱雀大路西側溝の存在が予測される位置にある。ここでは、図示したように、耕土・床土下にある砂礫層の上面で、南北溝と土壤を検出した。SD 2897は幅1m、深さ0.2m、SD 2898は幅1.5m、深さ0.15mである。SK 2899は深さ0.2m前後の浅い土壤である。先述したように、調査地には朱雀大路の西側溝の存在が予測されており、今回検出した南北溝のうちいずれかが西側溝である可能性も残る。しかし、両溝からの出土遺物が皆無のため、年代の決め手を欠くことや溝の規模が既知の朱雀大路側溝規模より小さい点を考慮すると、両溝とも朱雀大路の西側溝とは断定し難い。今後の周辺地域の調査に待ちたい。



調査地位置図 (1 : 4000)

飛鳥・藤原地域の遺跡

遺跡番号	遺 跡 名	遺跡番号	遺 跡 名
1	藤原宮大極殿	26	橘寺
2	醍醐庵寺	27	エビノコ大殿遺跡
3	膳夫寺	28	岡寺
4	興善寺	29	嶋宮
5	日向寺	30	石舞台古墳
6	奥山久米寺	31	都塚古墳
7	日高山瓦窯	32	飛鳥稻淵宮殿跡
8	紀寺	33	柴原寺
9	上ノ井手遺跡	34	高松塚古墳
10	山田寺	35	中尾山古墳
11	本薬師寺	36	定林寺
12	田中宮推定地・田中廃寺	37	龟石
13	小笠田宮推定地	38	天武・持統陵
14	豊浦宮推定地	39	菖蒲池古墳
15	豊浦寺	40	鬼道・廁
16	西念寺山瓦窯	41	猿石
17	半吉遺跡	42	岩屋山古墳
18	水落遺跡	43	牽牛子塚古墳
19	石神遺跡	44	マルコ山古墳
20	飛鳥寺	45	鐘子塚古墳
21	飛鳥寺瓦窯	46	益田岩船
22	弥勒石	47	軽寺
23	酒船石	48	久米寺
24	飛鳥板蓋宮伝承地	49	樞原遺跡
25	川原寺・飛鳥川原宮	50	大窟寺

